ンオレポナ

313
600

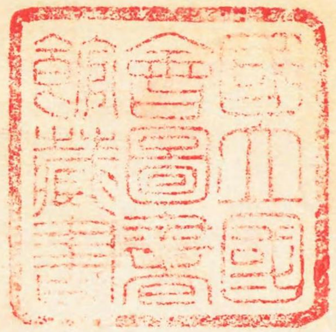
世界少年少女偉人傳大系（11）

ナポレオン

山野虎市著

金の星社版

27
Y-3



150705

H. Vogel

はしがき

このナポレオンの傳記は英國のマアシャルといふ人が子供のために書いたナポレオン傳によりました。

ナポレオンぐらゐ思ひ切つた大仕事をやつた者は、古來の英雄中にも稀です。華々しいといつたら、ナポレオン位はなゝしい生涯を送つた者はないでせう。

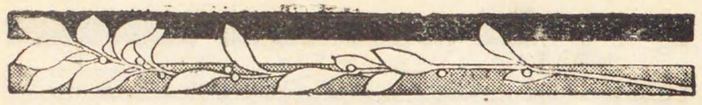
しかし、ナポレオン傳を讀む讀者は、英雄の一生が常に悲劇である事を知るでせう。榮えるものは、常に榮えず、古來の英雄の末路は、何れもあはれな悲劇です。

ナポレオンもまたその一人でした。モスコーでロシヤに敗られ、最後にウ

エリントンの爲めにウオータートローの一戰で大敗北して、遂に太西洋の一孤島セント・ヘレナに淋しい死を遂げるあたりを讀む時、讀者は感慨無量、涙を覺えずにはゐられないでせう。

何れにせよ、このナポレオン傳は、皆さんに大きな感動を與へ、敎えるところも非常に多いと思ひます。彼が、世界の辭書より『出來ない』といふ言葉を拔いてしまへと叫んだことは有名です。そして、ナポレオン自身それを或程度まで實際に行つて、われ〳〵に見せてゐるのです。地中海の小島コルシカに生れた名もない少年の彼が、遂に歐洲からエヂプトまでも征服して、ナポレオン大帝とあがめられるに至つた、その奮鬪の一生は、それが傳說に近い古い時代の英雄でなく、今から百年餘り前に死んだ英雄だけに、生々と皆さんに迫るところがあると思ひます。

編者



目次

一、少年時代……一
二、小さい伍長……一七
三、エヂプト遠征……四〇
四、アルプス越え……五七
五、皇帝時代……七一

六、プロシヤ征伐……八一
七、スペイン浸入……九四
八、モスコー退却……一一五
九、エルバの皇帝……一一三
十、セント・ヘレナ……一一四

ナポレオン

山野虎市編

裝幀・挿畫……鳥羽古山

一、少年時代

ヨーロッパの南に、地中海といふ麗らかな、青い海があります。この海の中に、イタリーの海岸から、凡そ五十哩西にあたつて、山の多い、小さな、美くしいコルシカといふ島があります。

この島の人は、強くて、勇氣があつて、凡て山國の人はさうでありますが、この島の人は自由を愛しました。

併し、コルシカは長い間、ゼノアといふ國の屬國となつてゐました。自由を愛するコルシカの人々は、ゼノアの下に縛られてゐて、自分で自分の國を治めることが出來ないのを憤つて、たうとう、パオリといふ人を大將にし

て、ゼノアに背いて、自由のために戰爭を始めました。

コルシカの人々は、よく戰つて、ゼノアを負してしまふばかりになりました。するとその時、戰爭に疲れたゼノアは、コルシカをフランスに賣つてしまひました。

『ゼノアはまるで、豚か羊のやうに、我々をフランスに賣つてしまつた！』

かういつて、コルシカの人々は大層怒つて、ゼノアと戰つたやうに、今度はフランスと戰ひました。

この戰爭に加はつて戰つた人々の中に、チャールス・マリー・ボナパルトと、その妻のレチヂアといふ夫婦がありました。ボナパルトは、もと、イタリーの貴族でありましたが、長い間、コルシカに住んでゐたのです。コルシカでは、貴族も羊飼も、同じやうに貧乏で、同じやうに威張つてゐましたから、

貴族も平民もそんなに違ひがありませんでした。

レチヂヤ夫人は若くて、美くしくて、まだ娘のやうな女でありましたが、夫に從つて、戰爭に行つて、險はしい山や、狹い谷や、路のない森や、橋のない河などをわたつて、行軍をしたばかりでなく、雨と降る砲彈の下に立つて、勇ましく戰ひました。

レチヂヤはかよはい女でありましたが、自分の夫の安全と、自分の國の自由のために、英雄のやうに、あらゆる困難を忍んで、最後まで戰ひました。

併し、フランスは國が大きく、コルシカはほんの掌のやうな島でありましたから、流石に勇敢なコルシカ軍も、力盡きて、たうとうフランス軍に降參してしまひました。そしてコルシカは、フランスの領分となつて、大將のパオリは外國へ逃げてしまひました。

この戰爭が止んで、コルシカの人々がフランスに對して、悲憤の涙をしぼつてゐる頃に、チャールス・ボナパルトとレチヂア夫人の間に一人の男の兒が生れました。兩親は、この兒の名をナポレオンとつけました。

ナポレオンには澤山の兄弟がありましたが、家にはたつた一人しか下男がゐませんでしたので、お母さんのレチヂヤは大變忙がしくて、一々子供のお守をしたり、教育をしたりすることができませんでした。

そこでレチヂヤ夫人は子供達を、一ッの大きな空つぽの廣間に入れて、そこで勝手に遊ばせました。この廣間といふのは、壁にも床にも何一ッ飾りがなく、子供の玩具の外は、何にも置いてありませんでした。

この廣間では、子供達は何をしてもよいので、壁に樂書をしたり、いろいろの遊戯をして遊びました。ナポレオンはこの廣間の壁に、いつも兵隊が戰

爭に行く畫をかきました。そして、太鼓と木でこしらへた刀を持つて遊び、外の玩具には見向きもしませんでした。

ナポレオンは、また、近所の子供達と一しよになつて、戰爭ごつこをしましたが、その戰爭ごつこが、都合によると二三ヶ月も續きました。ナポレオンは何時も、戰爭ごつこの大將になつて、敵を咬んだり、ひつかいたり、自分より大きな子供をはり飛ばしたりしました。

ナポレオンは、時々、騷いだり、喧嘩したりして、兄弟をいぢめました。殊に、自分より年上のジョセフをよくいぢめました。

併し、また、ナポレオンは、幼い頃から、氣難づかしい、考へ深い顏をして、他の子供が遊んでゐる時でも、たつた一人で、默つて歩くやうなことがありました。

そしてまた、ナポレオンは着物のことなんぞには少しもかまはない子供で何時もだらしのない恰好をしてゐました。黒い髪をもじゃ〳〵と、灰色をした顔の上に垂して、靴下は、いつも靴の上にだらりとはみ出さしてゐるといふ有様でした。

ナポレオンは五ツの頃、尼さんが建てゝゐる女の子の行く幼稚園へ入れられましたが、暫時してから、兄のジョセフと一緒に男の子の行く小學校へ入れられました。この學校の各組では生徒を二列に並ばせました。そして各々一列に一本の大きな旗を立てゝ、生徒は皆その旗の下で勉強するのでした。その旗は一本は、カルタゴの旗で、一本はローマの旗でありました。

これは、昔、ローマとカルタゴが戰つたやうに、生徒等が、互に、よく學課を勉強して、負けないようにと勵ますためでした。

ナポレオンは兄のジョセフよりも歳が小さかつたので、カルタゴの方の列に並べられました。しかし、ナポレオンは、それが嫌でたまりませんでした。

といふのは、ナポレオンは、昔、ローマはカルタゴと戰つて勝つたのを知つてゐましたから、勝つた方のローマの旗の下にゐたかつたのです。そこで、そんな事には餘り頓着しないジョセフは、ナポレオンに代つて、ナポレオンをローマ方にして、自分はカルタゴ方の方に列びました。

ナポレオンは、また、何よりも兵隊が好きで、自分も大きくなつたら軍人になりたいと思つてゐました。

ナポレオンは、毎朝、學校へ行く前に、白パンを一切貰ひました。すると何時も、その白パンを一人の兵隊にやつて、自分はその代りに、惡い茶色のパンを兵隊から貰ひました。

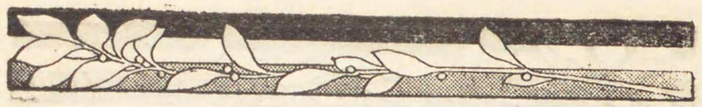
このナポレオンの仕業が、お母さんのレチヂャ夫人には面白くありませんでした。

『お前は、どうして、白いパンと茶色のパンと代へるのです？』

かう、或る日、レチヂャ夫人が聞きました。するとナポレオンは、

『私が、兵隊になつた時には、兵隊の食べるパンを食べねばなりませんからね。それに私は茶色のパンが好きですから。』と、答へました。

ナポレオンは、それ程に、軍人が好きでしたので、兩親も、ナポレオンを軍人にすることに決めました。そこで、九月の或る日、お父さんのチャールス・ボナパルトは、十歳に足らぬナポレオンと、やつと十歳になつたジョセフとを、小さい船に乘せて、フランスに向つて、コルシカを出發いたしました。ナポレオンは軍人になるために、そして、またお父さんのチャールスは



牧師になるために――

二人の子供は、オータンといふ町の學校にはひりました。少し羞しがりでしたが、快活なジョセフは、直ぐに組の友達から可愛がられるやうになつて、友達と一緒に遊戯の仲間に入つたりしました。

併し、ナポレオンは、それとは反對に、默り込んで、悲しさうな顏をして遊戯をしようともせず、たつた一人で散歩するといふ風でした。そこで他の子供達は『卑怯なコルシカ人』と罵つて、コルシカ島がフランスにとられたことをナポレオンの心に思ひ出させました。ナポレオンは、最初は、相手にしませんでしたが、或る日、不意に自分をいぢめる子供達に向つて、

『若し、フランスがコルシカの四倍位だつたら、コルシカはフランスに負けないのだ。併し、フランス軍はコルシカ軍の十倍もあつたのだからな。』と激

しく怒鳴りました。

そんな風で、ナポレオンは、兄のジョセフのやうに人からは可愛がられませんでした。しかし、ジョセフよりは、ずつと悧功でした。

ナポレオンは直ぐに、フランス語を讀み書きすることを覺えました。――コルシカ島ではイタリー語をつかつてゐましたから、ナポレオンとジョセフにとつては、フランス語は外國語だつたのです。併し、ナポレオンは上手に、フランス語をつかふやうになりましたが、でも、一生の間、隨分まちがつてフランス語をつかつたといふ話です。ことに書き方の方は、大層下手であつたといふことです。

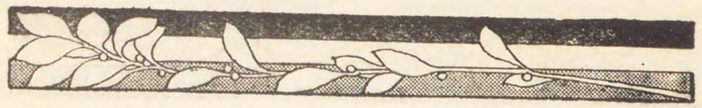
併し、この小さい、氣難づかしい、孤獨のナポレオンは、オータンの町には長くゐませんでした。オータンの町に來てから、やつと三ケ月目にお父さ

んのチャールスがやつて來て、ジョセフだけをオータンの町に殘して、ナポレオンをブリーヌの陸軍の學校につれて行つたのです。

二人の兄弟は、今まで、一度も別れて暮したことがなかつたのでした。ナポレオンは時々、兄をいぢめましたが、二人は大層仲がよかつたのです。ことに、遠い國から、親の家を離れて、言葉のちがつたフランスへ來てからは一層愛し合ひました。

いよ〳〵二人が別れねばならぬ時になると、ジョセフは聲をあげて泣きました。然し、ナポレオンはわざと、知らぬ振りをして涙を抑へました。そして、その黑い顏は、いつもよりも氣難づかしくなつてゆきましたが、でもたうとうしまひには涙が、ナポレオンの頰を傳つて流れました。

陸軍學校に入つた最初の内は、ナポレオンは幸福ではありませんでした。



ナポレオンは自分の思ひ通り、毎日、制服を着てゆく〳〵は軍人になるやうに教育を受けてゐましたけれども、でも、親の所へ歸りたくて病氣になる位でした。ナポレオンはこの學校で六年間もゐなければなりませんでした。

ナポレオンはこの學校でも、氣難づかしい、だまりやでしたから、仲間の者は、また、ナポレオンをいぢめました。仲間はナポレオンに『鼻の上の藁』といふ綽名をつけました。その譯は、ナポレオンが鼻を天井に向かせるくせとナポレオンといふ言葉が、フランス語の『鼻の上の藁』といふ風に聞えるからでした。それから、また、彼等は、以前の學校と同じやうに、コルシカのことをいつて、ナポレオンをからかひました。

『お前の國は負けた國だ。お前は奴隷だ。』

かういつて、仲間連はナポレオンをいぢめたのです。

併し、學校に入つてから四年目の冬、生徒達は、城や堡の造り方を敎はりました。生徒達は城や堡の種類や、その守り方や、攻撃する方法を敎へられたのです。この學課がつづいてゐる間に、大雪が降りつもりました。それを見たナポレオンの頭に、チラとよい考へが浮んだのです。

ナポレオンは、皆なで雪の城を築いて、防いだり、攻撃したりしようではないか、といひ出しました。

生徒達は、ナポレオンの思ひつきに、賛成して、大喜びでした。そこで、ナポレオンは、地面に堡を造る線をかきますと、生徒達は、ナポレオンの指揮に從つて、鋤や、手押車で、熱心に働きました。

堡ができ上つた時に、生徒達は二組に分かれて、雪を投げ合つて戰ひました。ナポレオンは、自分で大將になつて、兩方の組を指揮し、ある時は、攻撃する方の隊に、また或る時は、守る方の隊に命令を下しました。

先生達は、勇ましく、また、かしこく戰ふ生徒達の姿を見て、大喜びで喝采しました。

雪合戰の噂は、すぐに遠方までひろがつて、それを見に、澤山の人々が學校に集つて來ました。雪合戰は、冬中、雪が積つてゐる間、毎日つゞいたのでした。

ところがこの雪合戰で、澤山の少年達が、風をひきました。しかし、ナポレオンは、この戰爭で、軍人ほど面白いものはないといふことを悟りました。そして、自分は他の人を從へさせるために生まれて來た人間だと、思ひ込むやうになりました。

學課としては、ナポレオンは、ギリシャ語もラテン語をも學びませんでし

たが、飜譯書で、ギリシヤや、ローマの英雄の傳記を愛讀しました。ナポレオンは、今つかつてゐないギリシヤ語やラテン語で、英雄の傳記を讀むのは時間つぶしだと思つたからです。

ナポレオンは算術や、幾何が得意で、地理學もすきでしたが、何よりも歴史が好きでした。ナポレオンは暇があると、本を讀みましたが、その本は歴史の本か、でなければ、英雄の傳記でした。そんな風で遊ばなければならない時でも、始終本ばかり讀んでゐました。

ですからナポレオンは、たうとう丈が伸びませんでした。肩幅は廣かつたのですが、痩せてゐて、如何にも神經質らしい顔をしてゐました。

二、小さい伍長

ナポレオンは、ブリーヌでまだ數年、送らなければならないと考へてゐました。ところが或る日、バリーの陸軍幼年學校に入學を許されたといふ報らせを受けました。そこでナポレオンは、一千七百八十四年（今から百四十年程前）の九月三日、四人の友達と一しよに、フランスの都バリーに向つて出發しました。

バリーでは、ナポレオンは大元氣でした。こゝではもう、學校にゐるといふよりも、戰場にゐるといふ氣分でした。周圍の人は皆な軍服を着てゐました。ブリーヌの學校では鐘の音を合圖に眼を覺ましたり、床に入つたりしま

したが、こゝでは大鼓で合圖をしました。こゝでは夜となく晝となく、士官の號令の聲や、鐵砲をぢべたに下ろす臺尻の音や、射擊の響きが聞えました。話といふ話は、皆な戰さの話で、生徒達は自分達が學校を出てから屬する聯隊や、軍服や、劍のことを議論し合ひました。

パリーに一年ゐる間に、ナポレオンは試驗に通つて少尉となつて、ラ・フエールの砲兵聯隊に入ることになりました。それから、一千七百八十五年の九月三日には、一人の仲間と一しよに、バレニスの都にある聯隊にはひるために出發いたしました。二人はやうやく十六と十七の少年でありましたが、劍を下げ、皮帶をしめ、銀襟ボタンをつけた、眞實の士官になつたのですから、大變な喜び方でありました。併し、まだ、自分の聯隊の制服を着ることが許されませんでしたから、學校の服で旅行しなければならないのが、何よりつらいことでした。でも、劍をぶらさげて、得意になつた二人は、四輪馬車に乘つて、南の方へ向つて急いだのでした。

ナポレオンの入つたラ・フエールの聯隊は、有名な聯隊でした。又フランス砲兵聯隊の中でも、一ばん激しく働く聯隊の一つでありました。この聯隊の兵士達は、朝は早くから起きて、行軍、體操、射擊といふ風に暇なく働きました。ナポレオンは、士官といつても、まだほんの學生でしたから、極く初歩から軍隊のことを習はなければなりませんでした。軍隊のことを細かく知るために、ナポレオンはこの聯隊で、最初は砲手の役をつとめ、その次に伍長となり、次ぎに軍曹となりました。それからやつと、一人前の士官ができ上る譯でした。

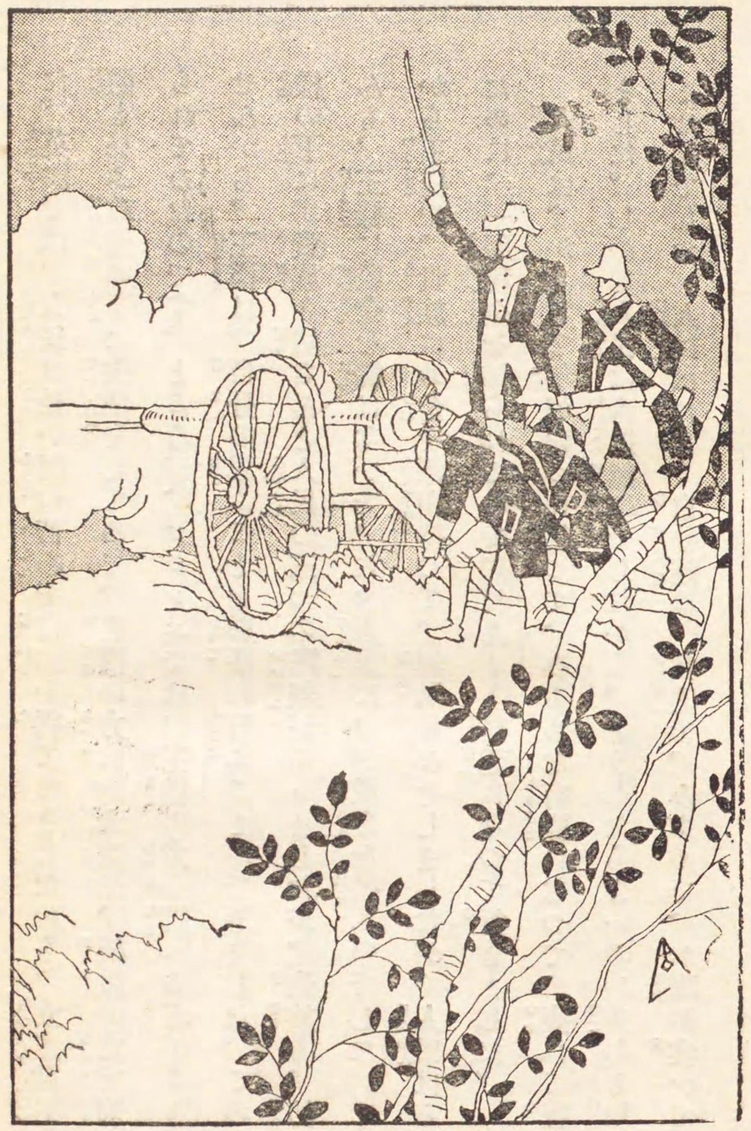
かうして、ナポレオンはきびしい軍隊の教育を受けながら、できるだけ、

軍人と戰爭に關する書物を讀みました。それからまた、地圖や、見取圖も上手に書きました。やがて、ナポレオンはこの聯隊の中でも優秀な士官となりました。

併し、ナポレオンは年中、そうして勉强ばかりつゞけてゐる譯ではありませんでした。時々は暇を貰つて故郷へ歸ることもありましたし、仲間のやるいろ〳〵の面白い遊戯にも加つたり、晩餐會や、その外いろ〳〵の會合へも出かけました。士官となつてからも、時々はむかつ腹を立てることもありましたけれども、以前のやうに氣むづかしい男ではなくなりました。

さうしてゐる間に、フランスの國の有樣が次第に變つて行つたのでした。

さて、フランスの王樣と人民の關係は、英國などとは大變ちがつてゐまし



た。英國では、人民は長い間の苦心で自由を得てゐましたから、立憲君主政體といふ政治の下に生活をしてゐて、王樣の力は、大臣や、議員の力で抑へられてゐたのです。ところが、フランスでは、王樣の力を抑へる者がありませんから、王樣は、自分の思ふことを勝手に行ふことができました。この王樣の下に、貴族と坊さんと人民の三つの階級がありましたが、貴族も、坊さんも、王樣に稅金を拂はないで、たゞ人民だけが稅金を拂ふのでした。ですから王樣や、貴族はお金を澤山持つて、無駄使ひをしましたが、人民はそのために、一層稅金を搾られるので、だん〳〵貧乏になつて行きました。

人民は、かうして年がたつに從つて、みぢめな有樣になつて、疲れて行きました。しかし人民は大抵無學でしたから、どうしたらよいのか少しも知りませんでした。人民はたゞ、自分達は、貧乏で、みぢめで、お腹が空いてゐることを知つてゐるだけでした。併し、だん〳〵騷動が多くなつて來て、一千七百八十九年の夏中は、騷動が引つゞいて起りました。

たうとう、饑えた人民達が、パリーで大騷動を起しました。人民は、國立監獄を占領して、打ち壞してしまひましたが、王樣はどうすることもできませんでした。

『これは騷動だな。』

かう王樣が、人民の亂暴を聞いた時に申しました。すると大臣が、

『いゝえ、陛下、これは革命でございます。』と申上げました。

この革命の波が、フランス中にひろがつて、王樣は位から追ひのけられ、何もかもメチャ〳〵になつてしまつて、人民は誰れに從つてよいのか、無我夢中の有樣になりました。

併し、ナポレオンは、コルシカ人で、フランス人ではありませんでしたから、この革命騒動にも餘り心を動かしませんでした。たゞ、革命のために、自分の愛するコルシカ島にも何かよい事が起るか知れないと考へた位でした。ですから、ナポレオンは、このあらしのやうな騒動の眞ッ最中に、暇を貰つて、故郷へ歸つたのでした。

その後、四年の間、ナポレオンはフランスとコルシカの間を行つたり、來たりしてゐました。ところがその間に、コルシカにもフランスと同じやうに、革命騒動が起つて、大騒ぎになりました。この機會に乘じて、コルシカの英雄パオリが外國から歸つて來ました。コルシカの人達は大喜びで、この英雄を迎へました。

ナポレオンは子供の時には、パオリをこの上ない偉い人として尊敬してゐました。併し、年とつた白髪の英雄と、いきゝして年の若いナポレオンとはまるで、考へが違つてゐましたから、二人は直きに爭ひました。

どんな問題で爭つたか、それはよくわかりませんが、熱烈な愛國者であるナポレオンは　フランスの味方をする事になつて、ナポレオンとそれから一家の人々は、こつそり、コルシカ島を逃がれて、さまゞの危い目に逢ひましたが、漸くにして、マルセーユの港へ無事に着きました。ナポレオンは、貧乏で困り切つてゐる母と妹達をそこへ殘して、自分はその時、ニースといふ所にあつた自分の聯隊へ行きました。この時から、ナポレオンは、一人のフランス人となつた譯です。

フランス國民が、王樣に叛いたのを見たヨーロッパの國々の王樣は、同盟を結んで、もしフランス國民がもう一度ルイ王を位に上せなければ、一致し

てフランスに戰爭をしむけるといつて脅しました。

最初、英國は、表向きこの同盟には加はりませんでしたが、一千七百九十三年の一月にフランス國民が、遂に自分達の王樣を死刑にしてしまつたのでたうとう、同盟に加はりました。それからフランス人の中にも、この列國同盟に加はる者もありましたから、フランスは外國の敵とも戰ひ、また自分の國内の敵とも戰はねばならないといふ有樣でした。

同盟軍を助けたフランス人の中に、ツーロンの人々がありました。同盟軍はツーロンの城砦を占領し、英國艦隊はツーロンの港を封閉しました。そこで、フランス革命軍はツーロンの都を圍みました。

ナポレオンは、砲兵の指揮官となつて、この戰爭に加はりました。ナポレオンが軍人として評判が高くなつたのは、このツーロンの包圍からです。ツーロンを陷れたのは全くナポレオンの力だといふ人もありますし、また或人は、ツーロンの戰ひでは、ナポレオンは、そんなに大した手柄を立てないともいひます。

それは兎に角として、ナポレオンがツーロンに着いた時には、革命軍の方では士官は足りないし、大砲もほとんど無いと言つてもいゝ位でした。そこでナポレオンは、直ぐと大活動をはじめて、四五日の中に、四十門の大砲とそれから新らしく堡をつくるのに、必要ないろ〳〵の材料を集めました。そして直ぐに堡と砲臺を築きあげ、火藥や、砲彈を集めました。ナポレオンは手紙を書き、命令を下し、そしてたえず戰ひました。

ツーロンの包圍は數週間もつゞきましたが、その間、突擊、突喊、逆襲、不意打ちといふ風に戰爭が毎日つゞいて、たうとう、ツーロン側の一方の堡

が陷落しました。

『明日か、でなくとも明後日、我軍はツーロンで夕飯を食べるだらう。』

と、ナポレオンがいつたこの言葉は當りました。港にゐた英國艦隊は、ツーロンを見捨る準備をしだしました。そこで、英國艦隊を生命の綱と賴んでゐるツーロンの人々は、泡を食つて、あはてふためいて、英國艦隊のところへ逃げのびて助けを求めようとしました。もし、英國艦隊に助けられなければ、ツーロンの人々は、恐ろしい革命軍の捕虜となる外、途がなかつたのです。

ツーロンの人々は、澤山のボートに、子供や女を乘せて、英國艦隊のゐるところまで漕ぎ寄せましたが、ツーロンの人々は、あはてふためいてゐるので、我れ勝ちにボートに乘らうとして、水に落ちて死んだり、荷物を積み込んだボートをひつくりかへしたりしました。

ツーロンの人々は、艦隊に逃げ込むのに、その日一日かゝりましたが、夜の九時頃と思はれる頃、恐ろしい爆發が起りました。夜の海は不意に晝のやうに明るくなつて、煙はもう〳〵と立ちのぼりました。炎は火山のやうに高く天を焦がして、人の叫ぶ聲は、天地をゆるがしました。これは英國の指揮官がツーロンを見捨てる前に、兵器庫に火をかけて、十二艘のフランス軍艦を爆發させたのでした。

その次の日、勝ちほこつた革命軍は、今は全く荒れ果てゝ靜まり返つてゐるツーロンの都に進軍しました。

さてナポレオンは、その頃、フランスを治めてゐる人々の中に澤山の友人がありましたから、ナポレオンにも幸運が向いて來たやうに見えました。併

しその頃は、何もかも、めちや〳〵の時代でしたから、昨日まで名譽の位にをつた人も、今日はその地位を失つて落ちぶれるといふ有樣でした。ですからナポレオンの友達も、不名譽な失敗をしますし、ナポレオン自身も、暫時ではありましたが、牢に入られるといふ始末でした。牢を出た後のナポレオンは、憐れな有樣に落ちぶれて、一人ぼつちで、バリーの街をあちこち、さまよひ歩きました。

併し、人から忘れられ、見捨てられたナポレオンにも、遂には運のむいて來る日が來ました。

その時、フランスは、外には敵を引き受けてゐるし、國内には人民の不安と、不平の聲が滿ちてゐました。もう國民は、革命政府に厭き〳〵して、どうかしてそれを打ち倒したいと思ふやうになりました。そしてバリーの市民は、武器を取つて、チユーレリーの宮殿を襲はうと決心しました。

そこで、革命政府の議員達は集つて評議しました。危險が刻々に迫つてゐましたから、一時も早く、何かよい計略を運らさねばなりませんでしたが、第一、兵隊を指揮するやうな軍人がありませんでした。

そこで議員達は皆な思案に餘つて、當惑してゐますと、ふいに、バラスといふ議員が立ちあがつて、

『私は今私共が望んでゐる一人の男を知つてゐます。それは生れはコルシカの一士官です。』と、いひました。

そこで革命政府は、ナポレオンのところへ使者を送りました。

使者の集た時は、もう夜更けでしたが、ナポレオンは直ぐ起きて、仕事にとりかゝりました。そして、次の朝六時には、もうチユーレリー宮殿へ通ず

る街道は、大砲で固められてゐました。

一方、暴徒の方では、大砲はありませんでしたが、小銃だけは持つてゐました。この小銃を持つた暴徒が三萬人、宮殿を包圍するために、狹い街の路をむらがつて進軍して來りました。

政府方の軍隊と暴徒とは、どちらからも鐵砲を打たないで、長い間、向ひ合つてゐましたが、たうとう、四時半頃になつて、ドンと一發、銃聲が聞えました。これが戰爭を始める合圖だつたのです。ナポレオンの大砲は街の上をとびました。暴徒方は、ナポレオンの打ち出す柘榴彈の爆發に面喰つて、味方の死骸を捨てゝ我れ勝ちに退却しました。

夕方の六時には、街はもとの通り靜かになりました。『小さいコルシカ人』のお蔭で、革命政府は勝利を得たのでした。そこで、ナポレオンは、陸軍總指令官の位にのぼりました。

それから、間もない、或る日、十二才ばかりの男の子が、ナポレオンにあひに來ました。この子供の名はユーヂエーヌといひましたが、涙を流して、自分のお父さんは軍人であつたが、フランスの自由のために戰つて、戰死したことを語りました。そして、お父さんの持つてゐた劍を貰ひたいといひました。ナポレオンはこの話を聞いて、大そう不憫に思つて、命令を出して、その劍を探がさせて、子供に渡してやりました。ユーヂエーヌはお父さんの劍を貰つて、いそ〳〵と喜んで出てゆきました。

その次の日、ユーヂエーヌのお母さんがナポレオンの所へ來て、昨日、子供が親切にして貰つたお禮をいひました。ナポレオンは、この美くしい未亡人を見て、大變よい人だと思ひました。女の方でもナポレオンをよい人だと

思ひました。それから暫時してナポレオンは、この自分よりずつと年上の未亡人のジョセフインと結婚をしました。

かうして、一文なしの、名前もないナポレオンが、またゝく間に有名になつて、よい暮しをするやうになり、そして、美くしい貴婦人と結婚したのでありました。この美くしい婦人の力で、ナポレオンは、フランスの偉い人々を友達とすることができたのでした。

併し、結婚してから、まだ十日もたゝないのに、この新婚の夫婦は、別れなければなりませんでした。といふのは、まだアルプス方面の戰爭が止みませんでしたので、ナポレオンはイタリーの軍隊を指揮して、遠くその方へ旅立たねばならなかつたからです。

ナポレオンは、オーストリヤとサルヂニヤの二ツの軍隊に向はなければなりませんでした。

ナポレオンは、この強い敵に對しては、たゞ急に進軍して行つて、不意打ちを喰はすより外に、よい方法はないと考へました。併し、かういふ戰爭をするためには、軍隊が素早く進む必要がありますから、荷物を持たずに行軍しなければなりませんし、そして、また、軍隊が行く先きゞで、必ず食物や着物が得られるといふことが、確かでなければなません。

ナポレオンは、オーストリア軍と、サレヂニヤ軍とが、一ツになつて向つて來ると、とても勝つ見込みはないと思ひましたから、敵の二軍を別々に分かれさして置いて、初めに一軍を破り、次ぎに二軍を破るといふ謀計をめぐらしました。この謀計は見事にあつたのです。

ナポレオンは、常に立派に部下の兵を指揮して、イタリーの平原とオース

トリアの山地で大勝利を得ました。

戰爭が止んだ時には、ほとんどイタリーの全部が、ナポレオンのものになりました。

戰爭の後、二つの平和條約が結ばれましたが、最初のを、談判の土地であるオーストリアのレオベンの町にちなんでレオベン條約といひ、第二のをコンポ・フオルミオ條約といひました。この第二の條約で、フランスは澤山の領地がふえて、ヨーロッパの地圖が變りました。これが皆ナポレオンの力でしたから、ナポレオンの名はます〳〵高くなりました。

ナポレオンは、この戰爭中、たゞ指揮官としてふるまつた計りでなく、まるで王樣かなんぞのやうにふるまひました。ナポレオンは、フランス共和國のために戰つてゐるのではなく、自分のために戰つてゐるやうに見えまし

た。ナポレオンは自分の思ふ通りのことを、誰にもはからずに行ひました。

『諸君は、私が内閣の法律家達の名譽のためにイタリーで勝利を得たと思ふかね。或はまた、私が共和國を建てるためだと思ふかね。そんな事はどうでもいゝ事だ。國民にはたゞ一人の君主が必要なのだ！　名譽をになつた君主が必要なのだ！』

かう、ナポレオンはいつて、自ら君主のつもりでゐました。併し、兵士達は、上手に、そして大膽に、軍隊を指揮して大勝利を得させたナポレオンを、深く尊敬してゐました。

この戰爭があつてから、兵士等はナポレオンを『小さい伍長』と呼びました。この名前は、ロヂの橋を渡つてアダ河を越えた後で、兵士達がつけた名前でした。オーストリア軍がアダ河の向うに陣を張つてゐる時、フランス軍は『フランス共和國萬歳』と叫びながら橋を渡らうとしましたが、敵は雨のやうに砲彈を浴びせかけたので、勢込んだフランス軍も、しり込みして進むことができませんでした。その時、ナポレオンは自分で、伍長のやうに旗を手にとつて、進め〳〵と鬪ましたので、軍隊はこれにはげまされて橋を渡つてしまひました。そして勢を得たフランス軍は、敵の陣地にまつしぐらに襲ひかゝつて敵の砲兵をばた〳〵と將棋倒しに倒しましたので、オーストリア軍は大混亂になつて、我れ勝ちに退却しました。

そこでフランス軍は、夜になるまで追擊して、さん〴〵オーストリア軍を惱ましました。

三、エヂプト遠征

カンポ・フオルミオの條約がしつかり決まつた後、ナポレオンは軍隊に別れて、パリーに歸つて來ました。

ナポレオンがパリーに着いた時、パリーの人民は、ナポレオンを見るために群がつて來て、熱狂して歡迎しました。そして、ナポレオンの住んでゐる街に『勝利の街』といふ名をつけました。併し、フランスの内閣の人達や大官達は、この背のひくい王樣のやうに威張つてゐるナポレオンを恐れてゐました。といふのは、ナポレオンは、鐵のやうに強い心を持つてゐて、行々はフランスの王樣になるやうな樣子が見えたからです。その上、内閣の人々は

どこへ行つても自分達が歡迎されないで、イタリーの勝利者であるナポレオンばかり歡迎されましたから、ナポレオンに對して、ねたみ出しました。併し、軍人達は、ナポレオンを是非、王樣の位に登せなければいけないといつてゐました。

その頃、フランスと英國は、犬と猿のやうに仲が惡くて、フランスの方ではどうかして、英國を負かしてやらうと考へてゐました。そこで、ナポレオンは、長い間考へてゐた謀計を、實行することに決心をしました。この謀計といふのは、エヂプトを攻めて、エヂプトの領地内に殖民地をこしらえて、英國がやつてゐる印度その他の東洋の國々との商業を、妨害しようといふのでした。

この時、エヂプトはトルコの領分でありました。そしてトルコとフランス

は仲がよかつたのでしたが、ナポレオンは一向そんな事に頓着なくエヂプト遠征を企てたのです。

フランス内閣は、眼の上の瘤のやうなナポレオンを何所かへ追ひやりたいと思つてゐたところですから、ナポレオンのエヂプト遠征には、直ぐと賛成しました。

そこで、ナポレオンは二萬の撰りぬきの兵士と、優れた士官達を集め、エヂプト遠征の用意をしました。この準備は、ごく秘密にやつたのですが、英國政府は、フランスが何か、穏かでない事をやつてゐるのだと氣がつきました。そこで、英國は、フランスの擧動を見張るために、ネルソンを大將として地中海に艦隊を遣はしました。併し、五月に、フランス艦隊がいよ〳〵出發しようと用意してゐた折、激しい暴風が起りました。この暴風のために英國の軍艦は大變な損害を受けて、ネルソンは、軍艦を修繕するために、サルヂニヤ島の港に行かねばなりませんでした。

ナポレナンは、ネルソンが地中海を去つたのを知ると、すぐに出發の命令を下しました。美くしく晴れ渡つた五月の或る日、夜のひき明けに、ナポレオンの大艦隊は、エヂプトに向つて出發しました。

『軍人諸君、ヨーロッパの凡ての眼は諸君の行動の上に注がれてゐます。諸君は、今や祖先の國のため、人類の幸福のため、また諸君自身の名譽のために、戰はんとしてゐるのです。』

かうナポレオンはいつて、兵士を勵ましました。そして、戰爭から歸つたら、兵士一人づゝに田地を六エーカー（一エーカーは四段二十四歩）を買ふだけの金を與へると約束しました。

間もなく、ナポレオンの艦隊は、マルタ島に着きましたので、ナポレオンはこの島を占領して、守備兵だけを殘して、エヂプトに向ひました。

六月の三十日の夕方、艦隊は、アレキサンドリヤに着きました。恰度、その時には、暴風が吹いてゐて、上陸するのは危ないやうに見えました。併し遙か沖合ひに、帆の影を見たナポレオンは、一刻もためらつてゐませんでした。ナポレオンは、英國艦隊に追つて來られるのを恐れたのです。

『天よ、たゞ五時間を與へよ。』

かうナポレオンはいつて、暴風の吹き荒れる暗闇の夜の中に、軍隊を上陸させました。併し、大勢の兵士が、荒浪に浚はれて死んでしまひました。

上陸すると、その夜の中に、フランス軍隊はエヂプトのアレキサンドリアに向つて進軍しました。兵士達は、お腹がへつて、疲れてゐましたが、夜のひき明けに、アレキサンドリアを攻撃しました。トルコ人とアラビヤ人は都の門を閉ぢて、この不意に襲ひかゝつた敵に對して、全力をつくして戰ひました。併し、間もなく、アレキサンドリアの都はナポレオン軍に占領せられて、フランスの國旗が城の上に高くひるがへりました。

七月になつてから、ナポレオンはアレキサンドリアを後にして、エヂプトのカイロに向つて、出發しました。

ナポレオンの率ゐる兵士達は、先きのイタリー戰爭の時には、燒くやうな日光の下でも少しも弱らないで進軍しました。といふのは、たとへ日光が強く照りつけても、進軍の途中は水の多い、よく肥えた野原であつた上に、行軍が終ると、直ぐに酒や、食物にありつけたからです。併し、こんどは、毎日毎日カン〳〵と照る日の光に照らされながら、人も獸物もゐず、青い木もめ

つたに見られない、焼けた沙漠を歩かねばなりませんでした。兵士達は、足は沙のために、火傷をし、唇と舌はひからびてしまひ、眼は砂の上にてり返へす日光のために、見えなくなり、身體は毒虫に刺されて、行軍はまるでひどい拷問のやうでありました。兵士達は、暑くてたまらず、軍服を脱ぎすて

て、

『大將がやらうといつた六エーカーの土地といふのはこの沙漠か。』といつて不平をいひ出しました。士官達も、この苦しみに我慢ができず、帽章まで取つて沙の上になげつけ、謀反をしようではないか、とひそ〳〵相談しました。併し、ナポレオンは一向平氣でした。

士官も兵士も軍服を脱ぎましたが、ナポレオンは平常の通り、厚い軍服をつけ、頸の所でキチンとボタンをしめてゐました。兵隊は皆な、苦しい息づかひをして、汗を流しましたが、ナポレオンだけは、身體も心も氷のやうに見えました。

かういふ譯で、弱り切つて歩けなくなつた兵士達は、澤山、列に後くれて倒れてしまひました。その上、時々アラビヤ人の騎兵隊が、鐵砲と、劍で不意に襲ひかゝり、ナポレオン軍をなやましました。フランス人の赤い血で沙漠の黄色い砂を染めた程でした。

二十四日の間、かうして苦しい旅をつゞけましたけれども、眼に見えるものは荒地と雲ばかりでしたから、兵隊は、果して行方にカイロといふ都があるのだらうかと疑ひ始めました。そしてナポレオンも疑ひ出したのでした。ところが或日、沙漠の彼方に、頂上の尖つた大きな山のやうなものがいくつも眼につきました。これは、有名なピラミッドだつたのです。

このピラミッドの近くに、普通マメリユークと呼ばれてゐるエヂプト兵が大砲をならべ、陣地を敷いて、ナポレオン軍を待つてゐました。

ナポレオンは望遠鏡で、敵の樣子を非常に注意ぶかく探ぐつて見ました。一體、ナポレオンは大變偉い大將でしたけれど、極く小さいことも決して見逃がしませんでした。望遠鏡で敵の陣列を細かに見てゐたナポレオンは、他の士官達が見ることができないものを見つけたのです。といふのは、敵の大砲には車がついてゐなかつたのです。注意深いナポレオンは敵の大砲は皆な地面に据ゑつけられてゐて、一方にだけしか射つことができないことを見つけたのでした。

そこで、ナポレオンは、大砲の口が向いてゐない横の方から軍隊を進めました。

『四千年以前から立つてゐるピラミッドが諸君を見下ろしてゐるのだ！』

戰ひがはじまつた時、ナポレオンはかういつて、軍隊を鬪しました。

かうして、燃えるやうな太陽の下で、燒きつくやうな砂の上で、フランス人とエヂプト人は戰ひました。世界で有名な敵のマメリユーク騎兵隊は、轡をならべて、何遍も〳〵、ナポレオン方の陣地に襲ひかゝりましたが、ナポレオン方は銃劍で垣をつくつて、防ぎました。この戰爭はピラミッド戰爭といつて、激げしい戰爭でしたが、エヂプト軍はたうとう、フランス軍に打ち破ぶられ、流石のマメリユーク騎兵も列を亂して逃げ出しました。ナポレオン軍はこれを追擊しましたので、敵は周章てナイル河に落ち込んで死んだり捕虜になつたりしました。やつと逃げ延びたエヂプト兵は、恐ろしい『火の王』だといつて、ナポレオンの名をエヂプト全國にいひふらしました。

ピラミッド戰爭がすんでから、四日目にナポレオンはカイロの都に入り、ここで陣屋をつくつて、五六ヶ月の間、戰爭をしたり、自分に逆く者を罰したり、新らしい法律をこしらへたりしました。

併し、それから間もなく、フランス艦隊が全滅してしまつたので、ナポレオンのこの勝利も遂に無駄になつたのでした。といふのは、フランス軍がエヂプトに上陸すると間もなく、英國の大將ネルソンは、ナポレオンの艦隊が自分の眼を掠めて、遁れ出たことを覺つて、ナイル河口に潜んでゐるフランス軍艦十七艘を打ち沈めたからです。

この報知を受けたナポレオンは、齒がみをして口惜しがりました。ナポレオンは英國に負けた上に、フランス本國との聯絡を斷たれてしまつたのです。そこで、トルコ人もフランス艦隊が全滅されたことを知つて、ナポレオンを襲ふために戰爭の用意をしました。

トルコ軍はシリヤに上陸する筈でしたから、ナポレオンは其所でトルコ軍と戰ふ手筈を決めました。ナポレオン軍は再び弱つた足を曳きずつて、沙の上の行軍をしなければならなかつたのです。

ナポレオン軍は、行軍の途中で、戰つたり、町を占領したりして、遂にエークルといふ所に着きました。

ところが、この町に「牛殺し」といふ綽名のあるゼサル・パシャといふ殘酷な酋長が住んでゐましたので、ナポレオンは、この酋長に使者を送つて、自分の味方になるやうにと說きました。ところが、酋長の方ではナポレオンの使者の首を切つて、その死骸を袋に入れて海に投げ込みました。

そこで、ナポレオンは城砦を圍みましたが敵はなか〳〵強くて、よく防い

で城が落ちませんでした。といふのも、英國の大尉シドニー・スミスが、灣の中に二艘の軍艦を繫いで置いて、兵士と鐵砲を敵に送つて助けたからです。

この戰爭は二ヶ月も續きましたが、そのうちに、アレキサンドリヤから彈藥を積んで來たナポレオン方の船が、スミス大尉のために捕へられたので、戰爭ができなくなつて、ナポレオンは非常に困りました。さうしてゐる間に軍隊の中に疫病が流行して兵卒がどん〳〵倒れるといふやうな始末で、流石のナポレオンも、不本意ながら、包圍を解いて退却しなければならなくなりました。

五月の或る夜、ナポレオンは暗闇に乘じて、こつそり退却を始めました。かうしてナポレオンは、日夜負かしてやらうと思ひつゞけてゐた英國のために打ち負かされて『東方征略』もはかない一場の夢となつてしまつたのでし

た。

エークルからの退却も、これまた長い拷問のやうな苦しみでありました。兵士はたいてい病氣になるか、傷を受けてゐました。達者な者も身體がへとへとに疲れ、心は沈み切つてゐました。この憐れな行列が、ぞろ〳〵と燒くやうな日光の下を退却したのです。病氣で歩けなくなつた兵士は擔荷に乘せて運びましたが、運ぶ方の兵卒も、やつと自分一人で歩けるのが關の山でしたから、病氣の戰友を道傍に捨てゝ歩きました。捨てられた病兵や負傷兵は、路の傍に死んだり、殘忍なトルコ人に捕へられたりしました。

水に飢えてゐた兵士達は、遠方に棕櫚の樹が青々と茂つた、オーシス（水溜り）を見つけたと思つて近づいて見ると、それは沙漠の空に時々現はれる蜃氣樓であつたりしました。時には水を見つけて、飲んで見ると、それは鹽水であつたために咽喉が一そう渴くといふ有樣でした。その上斷へず、トルコ人やアラビヤ人が追つかけて來て、弱つてゐる兵士を打ち殺しました。併し遂に、この長い拷問のやうな退却も終つて、軍隊は再び、カイロに戻つて來ました。

こゝで、ナポレオンはトルコ人を打ち破り、大勝利を得て、エークルで負けた耻をそゝぎました。

シリヤ戰役の間中、ナポレオンはフランスからの通信を少しも受け取りませんでしたが、こゝで初めて、五六枚の古新聞が手に入りました。この古新聞で、ナポレオンはフランス本國の事情が、すつかり惡くなつてゐることを知りました。イタリーはいふに及ばず、ナポレオンが打勝つた國が皆なフランスに背いてゐましたが、フランス政府はどうする事も出來ないといふ有樣

が、新聞紙上にあり〳〵と現はれてゐました。

『馬鹿者どもがイタリーを失くしてしまつた。俺の勝利の結果は臺なしになつてしまつた。俺はエヂプトを去らなければならない。』

かうナポレオンはがつかりして叫びました。けれども、軍隊をフランスへ乘せて歸るだけの船がありませんでした。そこで、止むなく、一人の大將に殘つてゐる軍隊を任かせて置いて、自分一人、僅かに五百人の兵士を引き連れて、フランスに歸ることに決めました。

兵士には少しも知れないやうに、こつそりと出發の用意をして、ナポレオンは五百の兵士と共に、八月の或る暗い夜に、青白く輝く星を目當てに、出來るだけ靜かにアレキサンドリヤの港をさして落ちて行きました。そして豫て用意して置いた二艘の船に乘り込んで、フランス本國へと出發しました。

四、アルプス越え

ナポレオンがフランスに着くと、國民はまた大騷ぎをして歡び迎へました。これといふのも國民は、もう總督政府の政治に厭きて、何かの變化を待ち望んでゐたからです。大將になつてゐるぐらゐでは滿足が出來ないで、國民の支配者にならうと望んでゐたナポレオンは、この機會をうまく摑へました。

ナポレオンは、パリーの總指揮官となつてゐました。そこで或日、軍隊の先頭に立つて、國會の議事堂の立つてゐる宮殿の廣場に乘り込みました。國會は忽ち、叫び聲や、太鼓の音や、銃劍の閃の中に、軍隊に占領されてしまひました。その日ナポレオンは、フランス總督の稱號を受けて、その夜はル

クサンブルグの宮殿の中で眠ることになりました。

ナポレオンの外に別に三人の總督がありましたが、その人達は總督といふ名ばかりで、實際の總督はナポレオン一人でありました。

ナポレオンは九月にエヂプトから歸つて、十二月にフランス最初の總督になつたのです。それから五六ケ月の間、ナポレオンは非常に熱心に、政治のために働きました。そのために八ケ月の間、麻のやうに亂れてゐたフランスも、漸く穩やかになつて來ました。

併し、フランスの國境には、まだ戰爭が止みませんでした。オーストリアと英國はフランスの強敵でした。ナポレオンはできるなら、英國と和睦しようと思ひましたが、オーストリアは全滅させて、ヨーロッパ各國をあッと言はせてやりたいと思つてゐました。ナポレオンは、世界が眼を見はつて、驚くやうな大きな手柄を立てたいと願つてゐましたし、また世界各國と仲よくしたいとも思つてゐました。併しナポレオンは、戰つて勝利を得た後の平和を望んでゐたのでした。

イタリーへ行つてゐた軍隊は、勇將マセナのもとに、よく戰ひました。しかし、今は、海からは英國艦隊に擊たれ、陸からはオーストリアの陸軍に圍まれて、ゼノアに封じ込まれてしまつて、糧食は不足し、兵士達はみんな骸骨のやうになつてゐました。そこで、オーストリア軍の方では、忽ちにマセナ軍を全滅させて、フランスに乘り込むことができると信じてゐました。

ナポレオンは、新に一軍隊を組織すると、それに「豫備軍」といふ名をつけて、マセナ軍を助けるために進軍の用意をしました。併し、この「豫備軍」といふのは、身體の弱い、軍服も碌に揃つてゐない、訓錬の足らぬ新兵ばか

りでしたから、オーストリア軍の方では嘲笑つてゐました。ナポレオンは、この新兵を檢閲するためにヂジョンといふところへに行きましたが、そこではたつた二時間ゐただけで、直ぐとゼネバに向つて急ぎました。

三ケ月の間、ナポレオンは極く秘密に軍隊を集めて、その軍隊を各々違つた道から、スイッツルに向つて送りました。それからまた、工兵を送つて、アルプス山の道を檢べさせました。かうして、用意が全部出來上ると、ナポレオンは雪の降る山國に向つて出發しました。

ゼネバに着いたナポレオンは、工兵を自分の周圍に集めて、地圖をとり圍んで、アルプス山へ登る道を檢べました。

『アルプスを越えることができるかね。』

かう、ナポレオンが問ひますと、一人の工兵が、

『越えることは難しいと存じます。』と答へました。

すると、ナポレオンは、

『よろしい、我々はアルプスを越えよう。』

といひました。

そこで、かの有名なナポレオンのアルプス越えがはじまつたのです。

ナポレオンの謀計では、敵が前面から迎へ撃たうとしてゐるのを、急にアルプス山を馳せ下つて、不意に敵の後に現はれようとしたのでした。

さて、ナポレオンは軍隊を四隊に分けて、各々、大セント・バーナード、小セント・バーナード、モントセニス、セント・ゴットハルドといふ四ツの道から別々に行進させることにして、自分は大セント・バーナードの道から進むことにしました。

これ等の道は、道といつても、それは名ばかりで、岩角が突き出てゐて、ただ歩くのでさへ困難な細道でした。この嶮しい山道を、背嚢を脊負ひ、鐵砲を擔つた上に、重い大砲を引き曳つて登らうとするのですから、その困難は大變なものでした。かういふ道では砲車を曳いては歩けませんから、大砲は、皆な車から取りはづして、刳つた材木の中に一々はめ込んで、雪や氷ですべ〳〵滑る狹い道を、漸くのことに引きづり上げたのでした。

車は別々にとり外して、荷物とし輪には棒を差し込んで肩に擔ひました。無論、兵糧をも運ばなければなりませんでしたが、これは驢馬に運ばせました。驢馬は、足の丈夫な、我慢の強い動物で、この邊の嶮しい道を歩き慣れてゐましたから、重い兵糧を運んで氷の道を歩くことができたのでした。併し、騎兵の馬はさうはゆきませんから、兵士は皆な馬から降りて進まなければなりませんでした。

かうして、五日の間、人と馬との長い行列が、白い雪を踏みにじり、谷々に太鼓とラッパの山彦を起こしつゝ、聲をひそめて、進みました。中には腰まである大雪の中に踏み込んだり、谷間に滑り落ちたりする者もありましたが、しかし、そういふ者でも隊に後れては大變と、岩角をつかんで起きあがつて、上へ〳〵と一心に登つたのでした。そして、軍隊は遂に山の頂きに達しました。

この頂きには、一千年の昔、セント・バーナードが建てた庵室があつて、澤山の清い坊さんが住んでゐました。そして何時でも、旅人を助けようと用意をしてゐました。ナポレオンの疲れた軍隊が、頂きに達しますと、この坊さん達は、パンや、酒や、チースを持ち出して兵隊に食べさせました。

こゝから軍隊は坂を下りましたが、馬や、驢馬にとつては、下り坂は、上り坂よりも困難でした。併し、たうとう滑りながら、轉がりながら、一番惡い道といはれてゐる道も、別に大した損害も受けずに、通り過ぎました。

併し、こゝに困つたことが起りました。といふのは、軍隊は是非ともバルドの城砦を通らねばならなかつたからです。バルドの城砦といふのは、僅かに四百人のオーストリヤ兵が守つてゐる小さい城砦でしたが、それが岩の上にあつて、その下をどうしても通らなければならないのでした。そしてその道の廣さは、漸く五十尺にも足りない程でした。

ナポレオン軍は、この城砦を占領しようとしましたが、なか〳〵城砦は落ちさうには見えませんでした。ところがナポレオン軍は偶然にも敵の丸の達しないところに、細い、山羊の通る道があるのを見つけました。そこで、歩兵は一人づゝこの道を通つて町に出ました。しかし、砲兵の方は歩兵のやうには旨くゆきませんから、夜の中に、こつそり、町に入り込みました。町に入り込んだ軍隊は、街道に糠や藁を敷いて、音のしないやうにして、大砲を引き曳つて、敵の鼻の先きを、靜かに通りぬけました。敵の方では、それとは少しも知らないで安らかに眠つてゐました。

この最後の困難を後にしたフランス軍は、まるで雪なだれのやうにイタリー平野に降りました。

ナポレオンがアルプスを越えたといふ通知がゼノアの城砦に達しると、飢えた城の兵士達は、今にも助けが來るかと思つて、沈み切つてゐた勇氣をとり直しました。併し、幾日たつても、フランス軍は城壁に現はれませんでした。その上、城の兵士達は、もう背嚢と靴と草と木の根の外には食物が少し。

もありませんでしたから、流石勇敢なマセナ將軍も、たうとう敵に降參してしまひました。

この間に、ナポレオンは、まるで戰爭に勝つた將軍のやうな勢で、イタリーを通過してゐたのです。ナポレオンがマセナ將軍を救はなかつたのは、その暇がなかつたからです。こんどの戰爭で、生きるか死ぬか、その運定めをしようとしも、その用意に忙しかつたのです。

さて、いよ〳〵フランス軍と、オーストリア軍とは、アレキサンドリアの町から遠くない、マレンゴーといふ小さな村で出逢ひました。

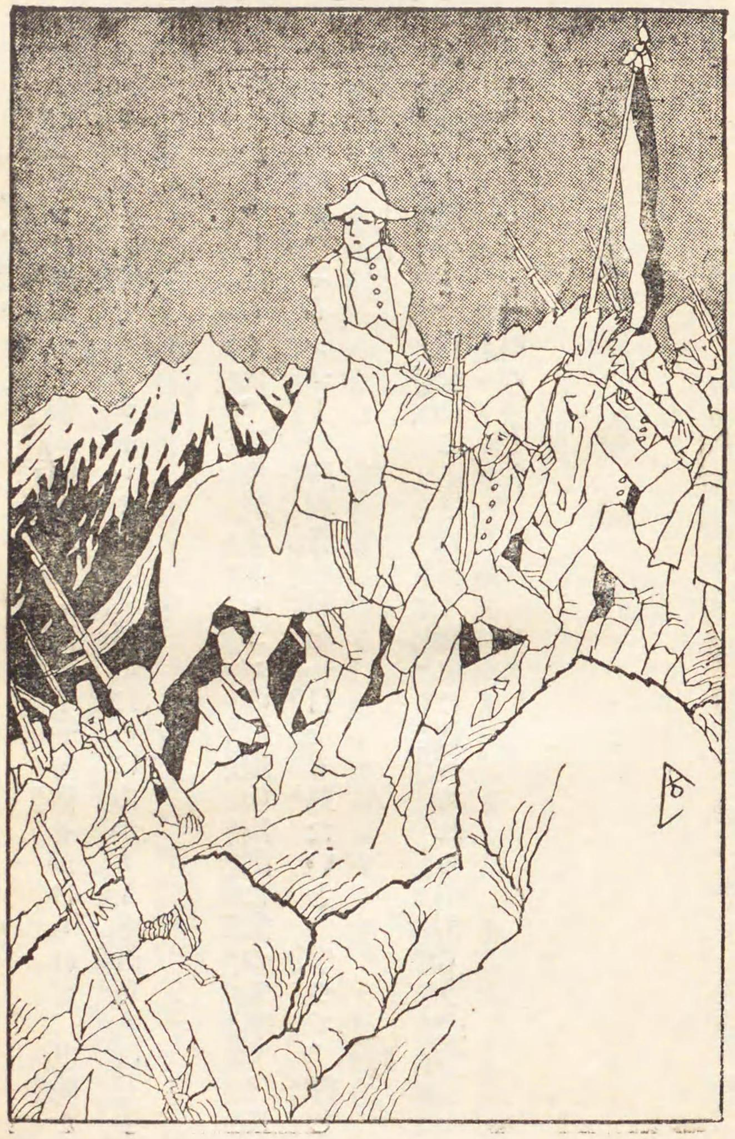
六月十四日の夜の明方に戰爭がはじまりました。この戰爭は恐ろしい激戰でした。兵士の數からいふと、オーストリア軍はフランス軍の二倍もありました。最初、フランス軍は負けて『我軍全滅！』と叫びながら退きました。が、忽ち勢を盛り返へして、再び押し寄せました。しかし、今度も敵のために、次第に追ひつめられて、遂に一時にどつと退却しました。ところが、オーストリア軍の總指揮官は、八十を過ぎた老人でしたから、長い時間の戰爭に疲れてゐましたので、午後の三時に、味方の勝利疑ひなしと信じて、兵を收めて退きました。

この時、一人のフランス士官が一隊の新手の兵を率ゐて、遙か前方から、ナポレオンの所にやつて參りました。

『戰爭は負けですか。』

その士官がいひますと、ナポレオンは、

『戰爭は勝ちだ。』といつて、不意の突喊を騎兵隊に命じました。すると忽ち



フランス軍が勢を得て、勝利を誇つたオーストリア軍は周章てふためいて退却しました。

かうして、すつかり打ち破られたオーストリア軍は、次の日、ナポレオンに降參の旗を立てゝ、和睦を乞ひました。この平和條約で、フランスは先きのカンポ・フォルミオ條約の時と同じく、北イタリーの全部をフランスのものにしてしまひました。かうしてナポレオンは、一度の戰ひで、先きに失つたイタリーを取り返へしてしまひました。

この戰爭は世界の眼を驚かせたと同時に、ナポレオンの名前は世界に擴がりました。

ナポレオンは、パリーを出てから、二ヶ月と經たないうちに、アルプスを越え、マレンゴーの野に大勝利を得て、再びパリーに歸りました。歸つて來

たナポレオンは群がつて來る國民から『萬歳！』を浴せかけられて、其晩からパリーのどの家でも、ナポレオンの名譽のためにあか〳〵と灯をともしました。

それから、しばらくは、群集がナポレオンの宮殿の周圍に集つて來て、アルプスの勇者、マレンゴーの勝利者の顔を一目でも見たいと、爭つて、押し合ふ有樣でした。

『今度の大戰爭と、自分のこととは長く歴史に傳へられるであらう。』

と、ナポレオンは叫びました。

五、皇帝時代

フランスは、今はヨーロッパ各國と仲直りをしました。そして、その後數年間、ナポレオンは靜かにフランスを治めましたが、この平和の數年間は、ナポレオンの生涯の中で一番幸福な時でした。ナポレオンは、この時に、自分の國のためにいろ〳〵の善い仕事をしました。

ナポレオンの勢力は日に日に大きくなつて行つて、最初は十年滿期の總督でしたが、次には終身總督となり、遂に、フランス皇帝の尊稱を受けました。ナポレオンは乞はれるまゝに、一千八百〇四年の五月十八日に自分はフランス皇帝であるとの布告を出したのでした。

この間まで、一文なしでパリーの町を彷徨ついてゐたナポレオンは、今は全世界中で、一番偉い人になつたのです。この時ナポレオンは、まだ三十五歳足らずの若者でありました。

さて、ナポレオンが皇帝であるとの布告が出、國民もそれを承知しましたが、まだ皇帝として冠を受ける式がすんでゐませんでした。そこでナポレオンは、自分の皇帝である位を固くするために、法王から冠を受ける方がよいと思つて、一人の友人を使者にして、法王をローマに呼びに遣りました。

法王ピウス第七世は、皆がナポレオンをフランスの正當の皇帝と認めてゐる今日、今更、別に冠を授ける必要はないと思ひましたが、式をすることが教會の爲めになるかも知れないと考へて、戴冠式のためにパリーへ行くことを承知しました。

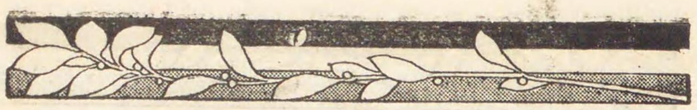
その頃、法王は、教會の首として、ヨーロッパの皇帝達から非常な尊敬を受けてゐたので、どんな高慢な皇帝でも、自分より上にゐる者として、法王の前には跪いたのでありました。併し、負けず嫌ひのナポレオンは、法王の前でも頭を下げるのはいやだと思ひました。そこで、法王がパリーに着く時間がよく分つてゐましたが、偶然、獵に出たやうな風をして、途中で法王に出逢ふ手筈をしました。

法王の馬車が、かねて法王が入るやうにと用意して置いたフオンテーンブロー宮殿の道からやつて來た時に、拍車のついた長靴を穿いて馬に乘つたナポレオンに出逢ひました。そこでナポレオンが馬から下りると、美くしい法衣を着、白い絹の靴を穿いた法王が馬車を下りて、泥の道を五六歩ナポレオンの方へ歩み寄りました。そこで若い皇帝と、年とつた法王が抱き合ひまし

た。ところが、かねて命令を受けてゐた通り、一臺の馬車が、そこへ馳けて來て、ナポレオンと法王との中に割つて入りました。と馬車に從つてゐた家來が、不意に兩方の馬車の入口を開きました。で法王は右の方から、ナポレオンは左の方から、同時に馬車に乘りました。かうして法王とナポレオンを乘せた馬車は、フオンテンブロー宮殿へ向つたのでした。

さて、ナポレオンは、戴冠式を成るべく、花々しくやらうと思つて、出來るだけの用意をしましたが、いよ〳〵準備がとゝのつて、九月の二日に式をすることになりました。

その日は、風の吹く寒い日ではありましたが、パリーの街々は、ノートルダームの敎會に馬車を驅る皇帝と皇后を見るために人の山を築きました。敎會は、寶石やリボンで飾つた服をつけた高官や貴婦人で一ぱいになり、



桂の葉にかたどつた金の花環を頭に戴いたナポレオンが入つて來た時には、『皇帝陛下萬歲』の聲で破れるばかりでした。

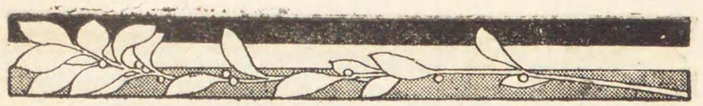
オルガンが鳴り響き、唱歌隊は後から〳〵と歌をうたつて、儀式は長く續きました。儀式が餘り長く續くので、ナポレオンは退屈して、欠伸をしました。ナポレオンには、この大切らしい式が、尊嚴でも神聖でもなかつたのです。

法王は手を顫はせながら若い皇帝の頭に置くために冠をとり上げましたが、ナポレオンは自分の手で、その冠を受け取つて、自分で頭の上に置きました。そして、今度は、それを皇后の頭の上に一寸乘せて、直ぐに、冠を置いてあつた元の臺の上に乘せました。とオルガンが鳴り出し、會衆はまた喜んで萬歲を叫びました。

それから暫時して、ナポレオンはイタリーに行き、ミランの大會堂で、戴冠式を行ひ、自分をイタリー王と稱しました。この時には、法王はこの儀式に關係しませんでした。といふのは、法王は先きにパリーで、ナポレオンから無駄な約束と恥辱を受けたゞけで、何の得る所もありませんでしたから、今度は、きつぱり式に列ることを拒んだのです。

かうしてゐる間に、ヨーロッパ各國の皇帝達は、ナポレオンを攻撃するために、互に同盟を結んでゐたのです。各皇帝は、ナポレオンが皇帝の冠を戴き、勢力が加はると、自分等の頭の冠が危ないと思つたのです。

スエーデン、ロシヤ、オーストリアは同盟を結びましたが、スペインと英國は喧嘩してスペインはフランスの方についてしまひました。かうして、ヨーロッパは再び戰場となつて、ライン河の邊りや、チロルや、イタリーでは



また銃劍の光がきらめきました。

ロシヤの皇帝ザーは大軍を集めて、オーストリアに送りました。そしてオーストリヤ軍と、ロシヤ軍が一ッになつて、フランスに浸入する手筈になりました。

ところが、オーストリア軍は、ロシヤ軍が到着しない前に戰爭をはじめました。ナポレオンは、敵がフランスに入り込む前に、獨逸に軍を進め、ロシヤ軍がまだ到着しない前にオーストリア軍をウルムの都に包圍しました。

オーストリア軍の指揮官マックは、愚にも、城の中にはまだ澤山の兵糧があるのに、七日の後、もろくも城を開け渡してしまひました。チロルでも、イタリーでも、何所でもオーストリア軍と、フランス軍と出逢つた所では、オーストリア軍は負けて、名のひゞいたマック將軍の殘兵も、チロルの山中

に逃げ込むといふ有様でした。かういふ次第で、ナポレオン軍は、向ふ所敵なく、ナポレオンは遂にオーストリアの都ヴイエンナに進軍しました。

オーストリア皇帝フランシスは、到底フランス軍を防ぐことが出來ないと思つて、ヴイエンナを見捨てゝしまひました。フランス軍は、ウルムを占領してから一月とたゝない間に、ヴイエンナの都まで浸入したのです。

ナポレオンは、ヴイエンナの都の立派な宮殿にゐて、四方に命令を傳へてゐました。ところが、フランスとスペインの聯合艦隊が、トラファルガルの海戰で、全滅になつたことを聞いたナポレオンは、

『俺の身體は一ッしかない。』と怒つて、叫びました。

ナポレオンは、敵に海で負けたので今度は陸で打つより外にないと考へ、ヴイエンナを捨てゝブラムの都に近いオースタリッチの平野に敵を迎え打ちました。この戰爭は、非常な激戰で、獨逸の皇帝と、ロシヤの皇帝と、フランスの皇帝が戰ひましたから『三皇帝の戰ひ』といつて有名な戰爭でありました。

寒風吹き荒さむ十二月の二日、東の空が少しばかり白くなつた時に、兩軍は白い霧に包まれて、音も立てず幽靈のやうに互に近づきました。と不意に朝霧が消えて、日は黃金のやうに照りかゞやきました。丁度この日はナポレオンが皇帝の冠を受けた日から一年目でありましたから、黃金色の太陽を見たフランス軍は、味方の勝利疑ひなしと思つて聲をあげて喜びました。

『オースタリッチの太陽が昇つた。』

ナポレオンもさういつて喜びました。

霧の中を進んで行つた兩軍は遂に衝突しました。この戰ひは實に恐ろしい激戰で、冬の短かい日でしたが、兩軍は一日中戰ひ通しました。

『まるで屠殺場のやうな有様で、敵と味方は顔と顔を突合せて戰つたのだ。』とその時、戰つた一人の兵士が、後で語りました。

一日中、どちらが勝たか分りませんでしたが、夜になつてからロシヤ軍とオーストリア軍は逃げ出しました。兩軍の死骸は山を築き、フランス軍は二萬人の敵を捕虜にしました。

かうして、ナポレオンは勝利を得て、オーストリアと平和條約を結び、ロシヤ軍は自分の國に引きあげました。この戰爭の後に結んだ平和條約は、これをとり極めた町の名にちなんで、プレスバーグ條約といひました。

この條約で、ヨーロッパの地圖はまた變化して、ナポレオンは新しい領地を得ました。ナポレオンは、これ等の領地を自分の親族に與へました。ナポレオンは自分を偉くしようとしたばかりでなく、自分の一族をも偉くしようとしたのです。

『俺はみすぼらしい親類を持つのは嫌だ。俺は一家族を皆な王にするのだ。』とナポレオンはいひました。そして、兄のジョセフをナポリの王とし、妻ジョセフインの娘ホルテヌスと結婚した自分の弟のルイスをポーランド王とし、ナポレオンの妹カロリンと結婚した將軍ムラットをバーグの大公とし、義子ユーヂエーヌにはババリア王の娘を娶はせました。それからしばらくして、自分の兄弟ゼロームと、ウーテンベルグ王の娘とを結婚させました。かういふ風にナポレオンは、一族を皆な高い位に即せました。

六、プロシヤ征伐

この時、獨逸聯邦中のプロシヤは、戰爭に加はりませんでした。プロシヤ王は自分の國民を戰爭の渦の中に卷き込ませまいと思つて、どちらの國にも附かないで、戰爭の仲間入りをしなかつたのです。もと、プロシヤは、陸軍の兵數も多く、訓練も充分で、大變強いと、人も我も信じてゐたので、ナポレオンもハノーヴアの領地をプロシヤ王に與へるといつて、プロシヤを戰爭に加はらせないやうに骨を折つた位でした。ところが、ハノーヴアの領地といふのは、それはナポレオンのものではなくて、英國のものだつたのです。ナポレオンはロシアとオーストリアとを擊退したので、プロシヤ王を馬鹿に

したのです。ナポレオンがプロシヤ王を侮つたのは、わざと喧嘩を買つたのか、それとも知らないでやつて先方の感情を害したものか、それは分りませんが、フランスとプロシヤの間に戰爭がまた始つたのです。

頼めば、英國とロシアとオーストリアは同盟して、プロシヤを助けたのですが、長い間戰爭の仲間入りをしなかつたプロシヤ王フレデリックは、プロシヤ一國でナポレオンに當ることにしました。

さて、プロシヤの陸軍は兵數は澤山でしたが、士官は大概歳とつた連中で、その上長い間、平和に慣れて、戰爭の仕方も忘れかけてゐるといふ有樣でした。一方、ナポレオン軍は、戰爭に慣れてゐる強い軍隊でしたから、プロシヤは到底ナポレオンの敵ではなかつたのです。

ナポレオンは、先きに、ロシア軍が來ない前に素早くオーストリアに進軍

したやうに、今度もプロシヤに向つて急に軍隊を進めました。

プロシヤ軍とナポレオン軍が衝突した場所はヂエナの近所でありました。

兩國の大軍は、その日相方から襲撃して何遍も〳〵戰ひましたが、勝利は遂にナポレオンに歸し、プロシヤ軍はさん〴〵に擊退されました。

その同じ日の、同じ時刻に、ヂエナから凡そ七里距てたオールスタットといふ所でプロシヤ軍と、ダヴオースト將軍の指揮するフランス軍とが戰ひました。プロシヤ軍はフランス軍より兵數が多かつたのですが、プロシヤ軍は打ち負かされ、その逃げた殘兵は周章てふためいて近くの城砦に逃げのびました。

かうしてプロシヤの大軍は一日の中に木葉微塵に打碎れてしまひました。

そこでフランス兵は雪崩のやうにプロシヤに侵入し、プロシヤの城砦は戰はずして、フランス軍に占領されました。要塞兵はナポレオンの名を聞いて吃驚したのか、或は、軍隊の中に裏切り者があつたのか、それとも何か外に譯があつたのか、要塞といふ要塞は碌に戰爭もしないで、フランス軍に開け渡してしまひました。勝ち誇つたフランス軍は、直ちにベルリンへと進軍しました。

すつかり弱り切つたプロシヤ王は、講和を申込みましたが、ナポレオンの持ち出した講和條件といふのが實に亂暴なものでした。――プロシヤ全國を我が物にする、といふのです。たとへ、戰爭に負けて弱つてゐるプロシヤ王も、こんな亂暴な話に耳を借すわけには行きません。それに今は、ロシア軍が、プロシヤを助けるために進んで來てゐるといふので、戰爭がまた續けられることゝなりました。此戰爭は、ポーランドにまで擴がつて行きました。

ポーランドを越えるといふことは、軍隊にとつては非常に困難なことでした。その時分、戰爭するには冬は休んで、春になつてから戰ふといふ習慣になつてゐましたが、ナポレオンはその習慣に從はないで、雨と雪と霙を浴びながら、膝までふんごむ泥道を進軍させました。軍隊の困難は非常なものでした。靴も軍服も破れてしまひました。フランスよりはずつと寒い北國の、ポーランドの冬は、薄着のフランス兵には凍える程寒くありました。それに兵糧は少いし、水は泥の混つた惡水で、家といへば、人と牛と豚が一しよに棲んでゐるやうな小屋があるばかりでした。

『これでもポーランドは一つの國かねエ。國なんていふには面の皮が厚過ぎるなア。』と一人の兵士が顏をしかめていひました。

『ポーランドの五分の一は泥だネ。』と、ナポレオンもいひました。

かうしてフランス軍は寒さにふるへ、雨に濡れて、飢ゑを忍びながら、戰ひつゝビスチユラ河を渡りました。

軍隊がすつかり疲れてしまつたので、ナポレオンも休息の命令を出して、本營をワルソーの都に設け、他の隊はビスチユラ河の堤に沿うた小さい村々に宿らせました。

軍隊の休息の期間は一ヶ月でありましたが、すつかり疲れ切つた兵士にとつては、一ヶ月は短かすぎました。併し、これも止むを得ませんでした。といふのは、フランス人よりも寒さに慣れたロシア人は、霜が降りて、沼や濕地が固くなると、馬や大砲を通すことが出來るので、その時を待つて、フランス軍に向つて進軍しようと用意をしてゐたからです。

さて、さうしてゐる間に、アイローといふ所で、ロシア、フランスの兩軍

が衝突しました。その日は、重い雲が灰色の天をつゝんで、雪にまじつた針のやうな風が、その前の晩、馬鈴薯だけしか食べなかつたフランス兵の青い顔を刺すやうに吹きつけました。

この悲慘な有樣の中で、兩軍は勇をふるつて、獸物のやうに戰ひました。

『ロシア人は牡牛のやうに戰つた。』とフランスの兵士が後でいひました。

かの有名なロシアのコサック騎兵は、馬を車のやうに自由に走らせて襲ひかゝりました。大砲は唸り、彈丸は霰のやうに降りそゝぎ、突喊の聲が地を搖り動かしました。そして雪が、その上に靜かに降りました。短い冬の日は暮れて、五萬の死傷者は野原に重なり合つて、赤い血が白い雪を染めました。でも、勝敗はまだ決しませんでした。

『何て恐ろしい虐殺だらう。何の役にも立たないのだ。』

その次の日、昨日の戰場を見廻つたフランスの士官が叫びました。

このアイローの戰爭の後、兩軍は、相方で退却しました。ナポレオンは前よりもずつとよい條件で、プロシヤのフレデリック王と講和をしようと思ひました。ところがフレデリック王は、ロシアの皇帝ザーもその仲間に入らなければ嫌だといひましたので、とうとう講和は成り立ちませんでした。

夏が來た時に、戰爭がまたはじまりました。幾回か合戰がありましたが、フリードランドといふ小い町の近くでの戰を最後として、戰爭は終りました。

その日の戰爭は、夜明けから夜の暗くなるまで續きました。ロシア軍はよく戰ひました。併し、ナポレオンは、自分の顏を見て喜んで萬歲を叫ぶ兵士の中を駈け歩いて、『今日は吉日だぞ、マレンゴーの勝利から丁度一年目に當る日だぞ。』といつて兵士を勵しました。

兵士はこの聲に弱つた勇氣をふるひ起して敵に向ひました。そこで、たうとうロシア軍も打ち破られて、ちり〳〵になつて逃げ出しました。ロシア兵はフランス兵の銃劍の尖で追れながら、全く周章へて、やつとニーメン河を渡り、そこに陣を敷きました。

兩軍はニーメンの大河を挾んで、その堤に向ひ合つて陣を張りましたが、さん〳〵に負けたロシア皇帝は、ナポレオンに向つて講和を申込みましたので、ナポレオンもそれに賛成しました。

そこで、ニーメン河のまん中に幕を張つた一艘の筏を浮べました。筏の上には鷲の印のついたフランスの國旗と、同じ鷲形を印とするロシアの國旗が飜つてゐました。この筏の中で、フランス皇帝とロシヤ皇帝が出逢つたのですが、二人は敵同士でありながら、兄弟のやうに抱き合ひました。二人は幕の中に入つて、人を退けて、こつそり長い間話し合ひましたが、幕から出て來た時には先きよりも一層親しげに見えました。

この會合の後で、ロシアの國境からほんの數里の所にあつて、これまでプロシヤに屬してゐたチルシットの町は中立國となり、ナポレオンとザーは一しよにその町に居ることになりました。

戰爭に脅かされたチルシットの町は俄かに喜びの町と變りました。毎日毎日競馬、晩餐會、舞踏會が續きました。激げしく憎み合つたフランス皇帝とロシア皇帝は、仲のよい友人のやうに見えました。

ロシアの皇帝は若くて立派な男子で、考へが大きく、偉い手柄を立てようと思つてゐましたし、ナポレオンもまだ三十七といふ壯年で、比ひない偉大な軍人で、政治家でしたから、二人は性質も合ひ、話も合ひました。

ナポレオンは時々、過激に、頑固に、殘酷になりました。しかしまた自分で思ふ通りに、優しく親切に見えるやうに取り繕ふこともできました。ナポレオンは國を取つたやうに、人の心を捕へることも上手でしたから、今、若いロシア皇帝ザーの心も自分のものとしたのでした。

『俺はロシアのザー皇帝に對する程、誰れに對しても誤解してゐた事はなかつた。ところが四十分間話しただけで、俺の僻みは夢のやうに消えてしまつた。俺はもつと早くザーと逢へばよかつた。』とナポレオンはいひました。

戰爭に負けた憐れなプロシヤ王も、チルシットの町へ招かれましたが、ザーに對しては非常に親切だつたナポレオンは、プロシヤ王に對しては大變に冷淡で　ナロシヤ王と、それから王と一しよに來た王妃を、チルシットの町に入ることを許しませんでした。プロシヤ王と王妃は町の外の小さい水車屋に居なければなりませんでした。ナポレオンはプロシヤ王に、自分は戰爭で大敗北をしたナポレオンの敵であることを、悟られるようにしむけました。そしてナポレオンは、ザー皇帝に、『プロシヤ王をチルシットの町へ呼んだのは、あなたに對する友情からだ』といひました。

チルシットで平和條約が決りましたが、その時でもナポレオンは、プロシヤ王に對しては少しも憐みをかけませんでした。この條約でフレデリック王は、國の半分をフランスに取られてしまひました。

七、スペイン浸入

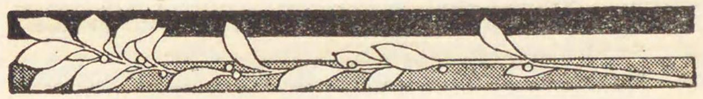
ナポレオンは、英國と戰ふばかりでなく、尙ほ英國の商業の妨碍をして、英國を弱らせようと考へました。そこでヨーロッパ全國に命令して、英國と取り引きすることを禁じました。

ナポレオンのこの命令があつたにも拘らず、ポルトガルは英國と取り引きをしました。ナポレオンはチルシットから歸るとポルトガルの攝政に使者を送つて、英國との取引きをやめて、ポルトガルにある英國の品物を全部取り押へ、その上英國に向つて戰爭を始めるようにいひつけました。そして若しこの命令に逆ふなら、フランスはポルトガルに向つて戰爭を開くといひました。

ポルトガルはほんの小さい國でしたから、無論ナポレオンに反抗することはできませんでした。そこでポルトガルの攝政は御無理御尤でナポレオンの命令通りにしましたが、ただ、英國の品物だけは取り押へませんでした。そこでナポレオンは、ポルトガルと戰ふ用意をしました。

この時、フランスの海軍は弱くて軍艦も少ないので、ナポレオンは、海から軍隊を送ることができませんでした。そこでポルトガルと戰爭するには、スペインを通つて軍隊を進めなければなりませんでした。で、ナポレオンはスペインと秘密條約を結び、スペインが、フランス軍の通ることを許すなら、戰爭に勝つた上は、ポルトガルの土地を分けてやると約束しました。

この時、ポルトガル國は、女王マリー一世が發狂してゐましたから、皇太子のジョンが女王に代つて攝政の位について政をとつてゐました。ジョン



攝政は、ナポレオンがポルトガルに對して戰爭の用意をしてゐると聞きますと、戰爭のことは、英國に任せて置いて、自分は狂人のお母さんを連れて、その頃ポルトガルの殖民地になつてゐたブラジルに逃げることに決めました雨の降る寒い十一月の朝、ポルトガルの女王と皇太子と、大勢の貴族は、泣き悲しむ國民を後にして、ブラジルさして船を出しました。

その間に、ナポレオンはベーヨンヌの町で大兵を集めましたが、元帥ジュノーはその兵を率ゐて俄かにスペインに侵入しポルトガルの都リスボンに向つて進んで參りました。この軍隊は、アルプス山に次いで、ヨーロパで一番高い山であるピレネー山脈を越えて、風の吹き荒ぶ平原や、嶮はしい谷や、河や、道といふ名ばかりの泥道を進みました。兵卒は弱りましたが、ジュノー將軍は少しも屈せず、前へ〳〵と兵士を勵まし前進をつゞけました。土地は穀物の實らない荒地でしたから、兵士は食るものに困る位でした。一體、ナポレオンの軍隊は、兵糧を運んで行かないで、行軍の途中で、食べ物を見つけるといふのが習慣になつてゐました。

『俺は兵糧のために、行軍を遲れさすやうな事はしない。二萬の兵卒は沙漠でも食物を見つけ出す事ができる。』とナポレオンは何時も云つてゐました。

さてジュノー將軍の率ゐるこの軍隊は、さうした困難に慣れない新兵でしたから、兵卒の多數は、弱つて歩けなくなつて、列から離れて、途の側で倒れて死にました。

が遂に、ベーヨンヌを出發したこの軍隊は、漸く一月程して、靴は切れ軍服はボロ〳〵になり、飢ゑて痩せ衰えた身體をしてリスボンに着きました。併し、もうこの時は、ポルトガルの女王と皇太子等を乘せた船は、遙か沖に

出た後でした。

フランス軍は殆んど戰はずしてポルトガルを占領しました。もし、ポルトガルの軍隊の中に、大膽な人間が五六人もゐたら、フランスの弱り切つた新兵を打ち破ることができたのですが、悲しいかな、ポルトガルにはそんな人間が一人もゐませんでした。

フランス軍は、ポルトガルの近衞兵を廢止して、その代りにナポレオン軍を置きました。そして、若し指揮者が現れて戰爭を起すといけないといふ譯で、ポルトガル兵は大概フランスへ送られました。そしてナポレオンは、ポルトガルの王族は、最早國家を支配する權力を失つたものだといふ布告を出して、人民から澤山の稅金をとりました。

かうしてジユノー軍がポルトガルに進んでゐる間に、別なフランス軍はスペインに侵入しました。この軍勢は小さいポルトガルを打つにふさはしからぬ大軍でありました。

『諸君が通過する地方の有樣を書いて送つてくれ。地方の道路、土地の具合、村と村との距り、その地に出る產物、これらの事を書いて送れ。』

ナポレオンは出發しようとする軍隊に、かう申し渡しました。これはたゞ、ポルトガルに達するために必要なことではなかつのです。ナポレオンの胸の中には、ポルトガルに勝つよりも、もつと深いたくらみがあつたのでした。

この時、スペインは亂れてゐました。スペイン王チャールス四世は歳とつた上に、鈍物でありましたから、王妃とゴドイといふ大臣が國を治めてゐました。併し王妃もゴドイも、善くない人間でした。

ゴドイは、ある時、フランスと自分の國との平和のために力を盡くしたと

いふ譯で、『平和の王』と立派な名で呼れてゐました。

しかし、チャールス王の總領息子のフエルヂナンドはゴドイを憎んで、何時もゴドイと爭ひましたから、スペインの朝廷はまるで喧嘩場のやうな有樣でした。そこで、ナポレオン軍がスペインを通ることになると、ゴドイ黨とフエルヂナンド黨とはお互に自分の身を助けてくれるようにとナポレオンに訴へました。それは丁度、猫の口に鼠を置くのと同樣でした。これを悟つた王と王妃は、ポルトガル王がブラジルに逃げたやうに、アメリカに逃げることに決めました。

しかし、この謀計が國民に知れましたので、國民は非常に怒つて騷動を起して、ゴドイの宮殿に暴れ込みました。ゴドイは身を隱して、姿を見せませんでしたから、暴れ込んだ連中は宮殿の中の立派な繪畫や道具をメチャ〳〵に、打ち毀して引き上げました。その間ゴドイは、顫へながら屋根裏に隱くれて、莚にくるまつてゐました。ゴドイは屋根裏に二日ゐました。しかし、腹が減つて來ましたので、こそ〳〵と這ひ出しました。ゴドイは誰れにも覺られずに、こつそり何處かへ逃げるつもりでありましたが、這ひ出すと直ぐに見つけられ、氣の立つた一揆のために八ッ裂きにされる所でしたが、皇太子フエルヂナンドのお蔭で生命だけは助りました。

歳とつた氣の弱いスペイン王は、自分の友達のゴドイがひどい目に逢つたのを見て、自分は王位を退き、フエルヂナンドに位を讓らうと決心いたしました。王はかうすれば騷動が止むと思つたのです。ところが、王位を皇太子に讓ると聞いた國民は、狂氣のやうに喜んで、お祝ひの印だといつて、ゴドイの住んでゐる家はいふに及ばず、その親類や友人の家を燒いてしまひまし

た。そして皇子フエルヂナンドこそスペイン王だといふ布告を出しました。

併し、人民の喜びは長くは續きませんでした。父王は直ぐに息子に王位を讓つたことを後悔して、また自分が王にならうとしたのです。さうしてゐる中にフランス軍は首府のマドリッド近くまで進んで來ました。

ナポレオンが來たといふので、父王と王妃がナポレオンに逢ひに行きましたが、フエルヂナンドもまた、ナポレオンに逢つて、今度の事件を訴へようとしました。併し、國民等は、若いフエルヂナンドがナポレオンのやうな人間に逢へば何かよくない事が起るに違ひないと考へ、手を盡してフエルヂナンドの決心を飜がへさせようとしましたが、フエルヂナンドはたうとうナポレオンに逢ひに出かけました。そこで人民達は先き廻りして、フエルヂナンドの乘つてゐる馬の手綱を切りましたが、フエルヂナンド皇子は、それでもナポレオンに逢ひに行きました。

フエルヂナンドは國境に參りましたが、ナポレオンの影も見えませんので、フランスに進み入つて、ベーヨンヌでナポレオンに逢ひました。

そこへ、父王と王妃とゴドイがやつて來たのです。かうしてスペインの王族は、フランス軍に圍まれた捕虜となつたのです。云はば彼等は、國境を越えて、わざ〳〵敵の陷穽に落ちに來たやうなものでした。

ナポレオンは、自分に仲裁を賴みに來たこのスペインの王族に向つて、『私の親類の者を一人、スペイン王にしたいのだから、あなた方はお互に王になりたいといつて爭ふ必要はないのです。』と云ひ放ちました。そして、『スペインのブルボン王家は廢された。』と例の嚴な調子でいひ渡しました。

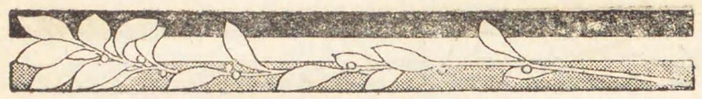
あはれなスペインの王族に何ができませう。國はフランス軍隊に占領せら

れ、自分等は外國で捕虜となつたのです。ナポレオンの命ずるまゝに、王冠を投げ出してしまひました。

ナポレオンは、かうしてやす〳〵と、ポルトガルとスペインの殖民地を自分の手に入れました。併しこれは卑しい謀計で相手を騙したのです。

『私が失敗した後になつて、ふりかへつて見ると、自分のやつて來たことは皆な醜い。』とナポレオンは、ずつと後になつてから申しました。

ナポレオンは兄のジョセフをスペイン王の位に即けました。スペイン人は謙遜な禮儀の正しい國民でありましたけれども、勉強嫌ひで、怠け者で、元氣のない國民でした。併し、ジョセフがスペイン王になると聞いて目が醒めました。スペイン人は、村から、町から、蜂のやうに起つて、國家の自由と王の位のために戰ふ用意をしました。



さうかうしてゐる中に、新にスペイン王となつたジョセフは、フランス兵に守られながら、スペインの都に住むためにやつて參りました。

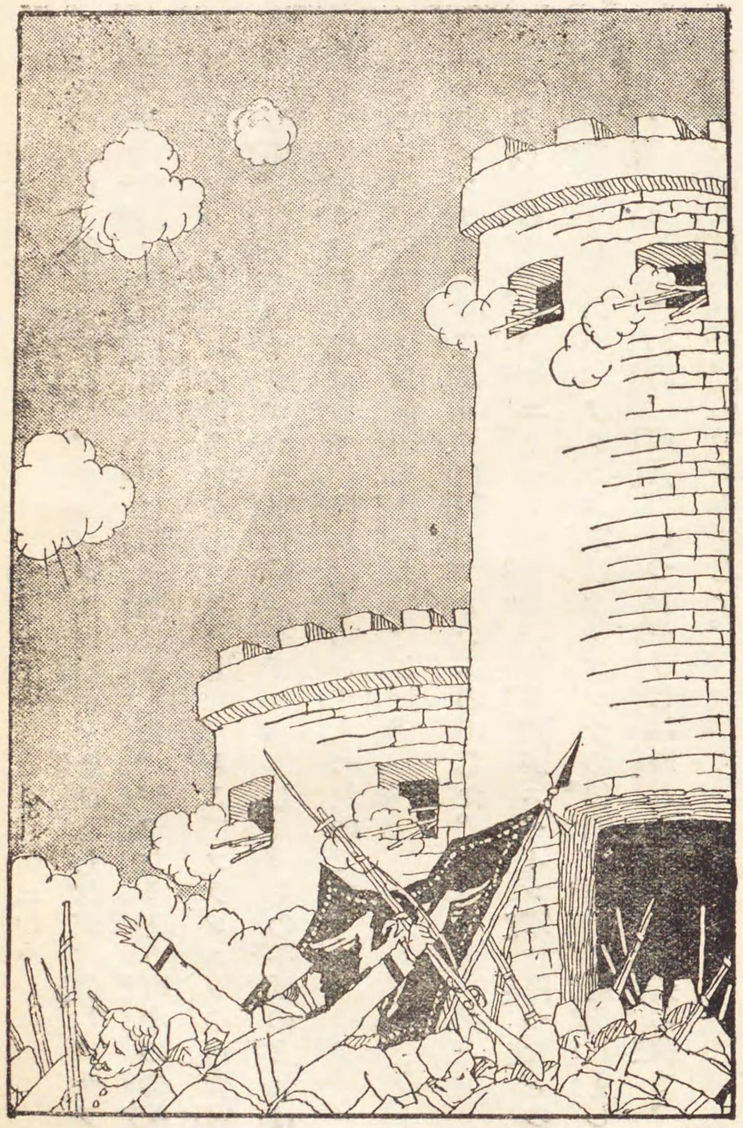
スペイン人は默つて澁い顏をして自分等の王を迎へましたが、ジョセフは自分をとり圍んでゐる顏が皆な暗い顏ばかりなので、スペインの中には自分の友人が一人も居ないのだと氣づきました。

間もなく、スペインの各所で戰爭が始りました。ところが、ナポレオンの方では、スペインでは何も彼も、自分の思つた通りにいつたものと安心してペーヨンヌを去つて、フランスの町々を歷巡る旅をはじめたのでした。

併し、ナポレオンが旅に出た時には、既に味方のヂューボン將軍とその軍隊が、スペイン軍に降參したといふ報知を持つた使者が、フランスへ向つて急いで出立してゐたのでした。

ヂユーボン將軍の降參の知らせを受けたナポレオンは、火のやうに怒つて、『これは意外だ！　自分の愛してゐた友人のヂユーボンが、兵士と一しよに降參するとは何事だ！　兵士と一しよに死ねばよいのだ。一度失つた名譽は取り返すことは出來ない。』と、どなりました。

スペインはどこもかこも、戰爭の煙で一杯になり、町々はフランス兵に圍まれました。その中でも有名な戰ひは、サラゴッサの包圍でした。サラゴッサの城砦は脆くはありましたが、兵士の心は敵愾心に燃えてゐて、男ばかりでなく女も勇ましく戰ひました。『サラゴッサの處女』といつて歷史で有名なマリア・オーガスチンといふ娘は、大砲の側に立つて、砲兵である自分の未來の良人を助けましたが、良人が丸に打たれて倒れた時も、少しもひるまないで、良人に代つて大砲を打ちました。

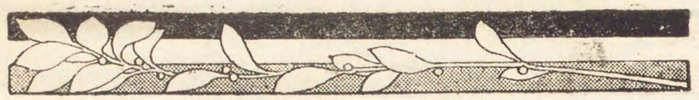


その中に、飢ゑと病氣が、サラゴッサの勇士を襲ひましたが、併し、サラゴッサの市民は、なほもめげずに防ぎ戰ひました。が、たうとう町中の寺院は大ていフランス兵に占領されてしまひました。そこでフランス軍の司令官は、手紙を書いて、サラゴッサ軍に降參をすゝめました。その手紙の文句は簡短で力强く、『司令部は命ず、降れ。』と書いてあつたのです。

ところが、返事もまた簡短で鋭いものでした。

『サラゴッサの司令部より。血戰！』といふのでした。

さうしてゐる中に、ヂユーボン將軍とその軍隊がスペイン軍に降つたとの報知が達しましたので、フランス軍はサラゴッサの包圍を解いて退却しました。フランス兵はこの時、或人がいつたやうに『毀れかゝつた城砦の前で、女の手で打ち破られた。』のでありました。



戰爭がすんだ後で、マリア・オーガスチンは他の兵士と一しよに勳章を授けられました。その肖像畫はヨーロッパの何所の繪草紙屋の店前にも下つてゐました。

さて、自由のために戰つたスペインは、英國の同情を呼びました。先きにスペインの艦隊は、フランスの艦隊と一しよにトラファルガルの一戰で全く打ち破られましたが、今は英國の同情はスペインに集り、英國のジョーヂ皇帝は『スペインはフランスの我儘と高慢に對して勇しく戰つてゐる。スペインは最早、英國の敵ではない、我々の友達であり、同盟國である。』といひました。

そこで英國の軍隊は、スペインの國難を救ふために送られました。英國とフランスとはまた戰爭となりました。この戰ひを『半島戰爭』と呼びました。

この戰爭はなか〳〵激しい戰爭でしたが、細々とこゝで述べる譯にはいきません。ことにこの戰爭では、ナポレオンはホンの暫時の間しかスペインにをりませんでしたから、こゝに書く必要もありますまい。それは兎に角として、ナポレオンは、この激しい戰爭の最中に、オーストリアとまた戰爭をはじめました。そればかりでなく、チロルではホーフアーといふ勇敢な人を指揮者として、百姓が軍を起しましたし、獨逸でも、ポーランドでも、イタリーでも、國民が起つてフランスに背きました。各方面で、これらの兵隊はフランス軍を破りましたが、ナポレオンが指揮した戰爭では何所でもフランス軍が勝利を得ました。

最後の大戰爭は、ワグラムといふ村の近所で開かれ、オーストリア軍は勇しく戰ひました。戰爭は夜まで續きました。その日戰場で討死した者は五萬人もありました。兩軍の戰死者は大慨同じ位の數でした。この戰爭は歷史上一番激しい戰爭の一つとなつてゐますが、ナポレオンにとつては、たゞ一つの戰爭で勝つたといふだけで、別に大したことではありませんでした。

併し、強い英雄でもなく、熱い愛國者でもなかつたオーストリア皇帝は、この一戰で弱つてしまひ、また〳〵ナポレオンに屈服しました。

九月の十四日にスチョンブランの條約がとり決められました。このスチョンブランといふのはナポレオンが住んで居つたヴイエンナの美しい宮殿の名です。

この條約でオーストリアはまた澤山の土地を失ひ、ナポレオンはアドリア海の島々をフランスの領地にしました。ナポレオンは北部オーストリア、ガリシヤ、ボヘミヤを自分に手助けした臣下の王達に與へました。ナポレオン

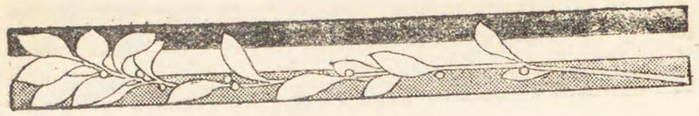
の大軍隊は、フランス人ばかりでなく、ナポレオンが伐ち從へた各國の人民から出來てゐて、その地方々々の指揮者が、ナポレオンの家來となつて、その命令に從つたのですから、ナポレオンはこれを自分の臣下の王とし各々土地を分け與へたのです。

スチョンブランの條約を結んでから、ナポレオンはパリーに歸りました。

さて、こゝにナポレオンの一生の中の一番奇妙な事柄が起りました。

ナポレオンは、まだホンの士官であつた時に結婚した美しいジョセフインをこの上もなく愛して、

『ジョセフインを愛することは、私の生命だ。お前が名譽を喜ぶから私も名譽を尙ぶのだ、お前が勝利を喜ぶから、私は戰つて勝つのだ。』とナポレオンは、ジョセフインへの手紙のうちに書いた程でした。



勝利の上にも勝利を得、身はフランス皇帝として威光が世界に輝くやうになつたナポレオンは、先きの手紙の文句を忘れて、美しい妻のジョセフインを離緣して、この間まで敵であつたオーストリア皇帝の娘マリー・ルイズを娶つたのです。

ナポレオンが何故かういふことをしたかといふと、一つはナポレオンは勢力が增すに從つて、王族の血統の連綿と續いてゐる皇女と結婚して、その皇女によつて子供を得たいと思つたのです。

ルイズがナポレオンと結婚した時は、まだ極く小さい娘でありましたが、もとよりナポレオンを憎んでゐましたから、ナポレオンが戰爭に負けた時には喜んでゐました。併し、その憎んでゐたナポレオンと結婚してフランスの皇后となつたのには譯があるのです。ナポレオンと結婚すれば、オーストリ

アの平和と自由を保つ上に都合がよいと考へた兩親がすゝめたので、それに從つたのでした。

八、モスコー退却

一千八百十一年三月二十日に、皇后ルイズは男の子を產みました。そこでナポレオンは、この赤ン坊を直ぐとローマ王としました。

年四十一歲で、自分の子供と共に皇帝の位にあつたナポレオンの得意はどんなであつたでせう。

『これより、益々自分の勢力は加はるだらう。』とナポレオンはいひました。

しかし實は、ナポレオンの勢力はもう下り坂になつてゐたのです。

ロシアは、英國と取引してはいけないといふナポレオンの命令を、出來ない相談だと思つて、皇帝ザーも人民が英國と取引するのをだん〳〵大目に見

るやうになりました。そこで、英國の品物が日々に多くロシアに入つて來るようになりました。これを見たナポレオンは怒り出して、それにまだ外の譯もあつて、たうとう、親しい友達だつたフランスとロシアの皇帝は戰爭をはじめてしまひました。

強いロシアを微塵にしてしまはうと決心したナポレオンは、六十萬の大軍を集めました。

獨逸、プロシヤ、オーストリア、オランダ、ベルギー、イタリー、ポーランド、スイツツル、スペイン、ポルトガルの諸國から集つた兵隊は、三つの隊に分れてニーメン河を渡つてロシアへと進みました。

併し軍隊の過ぐる所は、皆な穀物の出來ない裸體のやうな荒地で、一人の敵にも出逢ひませんでした。――たゞ、五六人の騎兵がゐて、

『君等は、どういふ譯でロシアへ入つて來たのか。』と問ひました。

『君等を征伐するために。』とこちらが答へますと、騎兵は默つて、馬に鞭をあてゝ遙か前方の森の中に霞のやうに隱れてしまひました。

このフランス軍の後には長い荷物の行列が續きました。併し、ナポレオンは、長い間、軍隊が入つた土地で兵糧を集めるといふ習慣になつてゐましたから、今度も矢張兵糧を運んで行きませんでした。ですから、直ぐに食物が無くなり、兵士は飢ゑに苦しまねばなりませんでした。

ナポレオン軍がロシアに入ると、ロシア人は退却しましたので、それから幾日も〳〵の間、退却して行くロシア軍の後を追ひながら、埃の立つ沙の道や、人氣のない廣い野原や、荒れ果てた村を通つて行軍をつゞけました。空氣はむし暑く、雲は低く垂れて、日の光は薄いといふ有樣で、兵士は疲れて

しまひ、それに飲水が不足で、咽喉が焼けついてしまひました。兵糧はといへば、あちこち探し廻つて、やつと僅かの食物を探出して來る有樣でした。

行く道々で、激しい戰ひが何遍もありましたが、その中で一番激しい戰ひはボロヂノの戰ひで、『大將戰爭』といつて有名なものでした。この時の戰爭でロシア軍の方では二十二人の大將と、フランス軍では十八人の大將が討死したのでした。

ボロヂノの戰ひから一週間許りたつて、或る秋の晴れ渡つた朝、ナポレオンとその軍隊は、見晴らしのよい『救ひの丘』の頂上から遙かにモスコーを見ました。

『モスコー。モスコー。』といふ聲が列から列へと傳はりました。幾百里も荒

野の途を行軍して來た疲れた兵卒には、モスコーの都は休息の港だつたのです。その待ち焦がれたモスコーの都が、軍隊の目の前に、堂宇、伽藍、尖塔を連ねて、朝日の光の中に現れたのでした。

『お寺の都、神聖なる都、モスコーへたうとう來た！』とナポレオンは馬の上から叫びました。

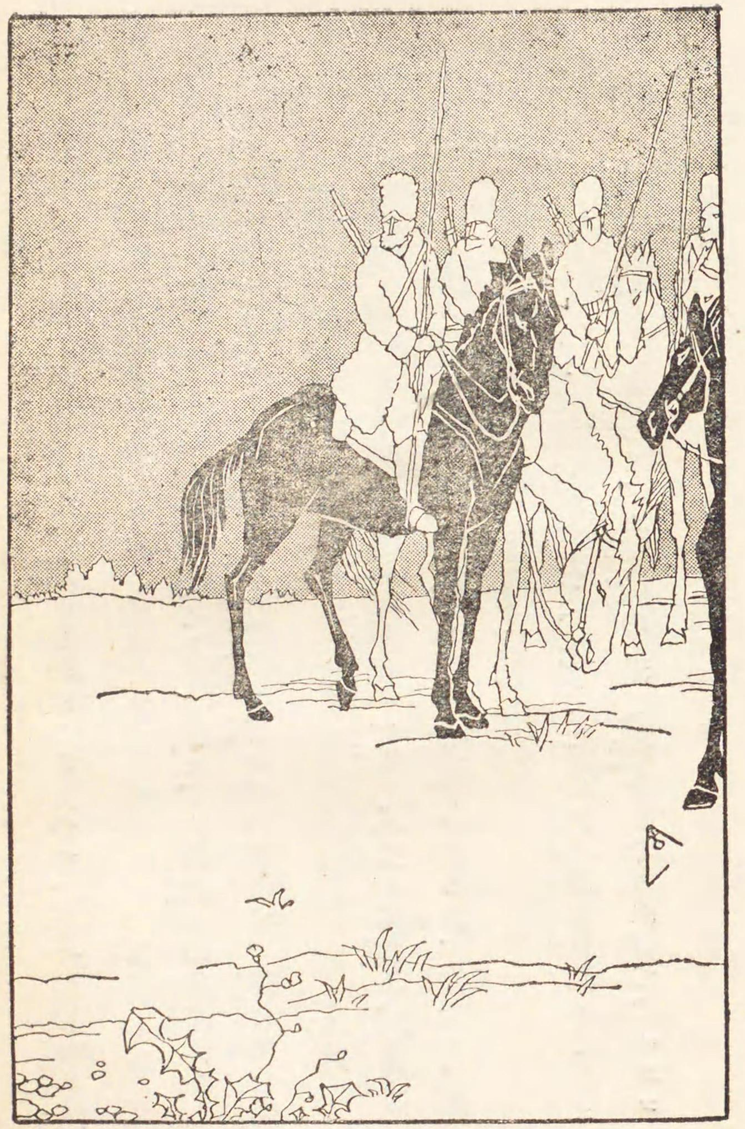
併し、ナポレオンが都に入つた時には、街は空つぽで靜まり返つてゐました。家々の窓は皆閉ぢられ、窓ガラスは、開き盲目のやうに下を通る兵士を見下してゐました。

これより先き、ナポレオン襲來の噂を聞いたモスコー人は、車に荷物を積で、皆な都から逃げ出して、軍隊もナポレオン軍が着いた前の晩には、長い行列を造つて都を見捨てたのでありました。軍隊が出て行く時、大きな澤山

の兵器庫を燒いたり、打ち毀したりしました。そして監獄の門を開いて囚人を自由に放つてやり、ポンプは役に立たないやうに打ち毀しました。かうして、大概、木造の家で出來上つてゐる大きな都を、彌次馬と、敵の手に任したのでした。

モスコー退却軍の一番おしまひの兵士が、モスコーの地を離れてから、僅か二時間經つてからフランス軍がモスコーに入つたのです。さて、フランス軍は、街が空つぽになつてゐて人がゐないのが分ると、兵士達は勝手に家の中に入つて、分捕りをしたり、家の中の美しい着物を着たり、矢鱈に酒を飲んだりしました。そして、しまひには醉つ拂ひも澤山出來ました。

併し、食つたり、飲んだり、笑つたりの大騷ぎが止みますと、都は一時に靜まりました。といふのはもう幾日も〳〵青天上の下で野宿した兵士達は、

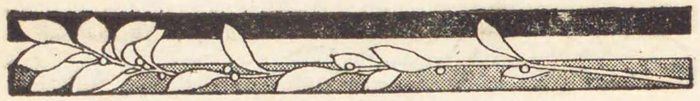


その夜、大きな宮殿に入り込んで、絹の布團にくるまつて、ぐつすり眠り込んだからです。

併し、夜中に『火事だ』といふ聲がきこえますと、もう火事の炎があかあかと都の空を焦してゐました。眠り込んだ兵士達が飛び起きて、外に出た時はもう夜が明けてゐました。

次の夜も火事が起りましたが、今度は火事が一時に八方から起り、丁度その時吹き起つた強い風に煽られたゝめ、火は忽ち全市をつゝみ、宮殿も、會堂も、店も見る〳〵灰になつてしまひました。

二日の間、ナポレオンは澁い顔をして、ぢつとこの大火事を見詰めてゐましたが、士官達の勸めに從つて、炎と烟の渦の中をくぐりぬけて、モスコーの都の外に出ました。



外に逃げ出したナポレオンは、町から大分離れたザーの宮殿に入りましたが、その宮殿の石が指で觸つてもあつい程火事は盛に燃えてゐました。

火事は、一方が濟むとまたその次ぎに移るといふ具合に、たうとう、モスコー市の五分の四を燒いてしまつて漸く靜りました。

ナポレオンは火事が鎭まつた後で、モスコーに歸つて、火事の光で、ロシア皇帝に宛てゝ書いた手紙の返事を待つてゐました。――この手紙は休戰を申し込んだ手紙だつたのです。併し、ロシア皇帝からの返事は、いくら經つても參りませんでした。

それから幾日も過ぎました。最初の中こそ旨い酒や、フランス兵が平生は食べてゐないような食物も澤山ありましたが、やがて間もなく、食物もなくなり、しまひには馬の肉の外は、一片のパンもなくなつてしまひました。そ

れにロシア兵が逃げる時、田畑を裸體にして、食物を皆な無くして行きましたから、フランス軍はどんなに彼方此方探がしても、一粒の穀物も見つけることが出來ませんでした。ナポレオンが百姓に向つて、どんな食物でも持つて來た者には高い金を拂ふといふ布告を出しましたが、これも役に立ちませんでした。百姓はナポレオンをひどく憎んでゐましたから、金に誘はれてわざ〳〵食物を持つて、モスコーへ行くやうな百姓は一人もありませんでした。百姓等は少しでもナポレオンを助ける位なら、右の腕を切り落してもよいと思つたのです。

その秋は割合に温かく、好い天氣も長く續きましたが、たうとう秋も終り恐ろしいロシアの冬がこれから始まるのだと云はん許りに、細かい雪が降りはじめました。ロシアの冬は實に寒く、その味は温かいフランス人には、なかなか分りません。その上にフランス軍には兵糧が無くなり、軍服も薄いといふのですから、なか〳〵にロシアの冬は凌げないのでした。

そこでナポレオンはも一度、アレキサンダー帝に手紙を書きましたが、今度も何の返事も返つて來ませんでした。

食物の少ない遠い外國で、冬を過すことは、無益で險呑だと覺つたナポレオンは、たうとうモスコー退却の命令を下しました。

かうして、ナポレオンは失敗をしましたが、併し、この失敗も自分の責任ではないと思つて、手紙に、

『モスコーは軍隊を置くにはよい場所ではない。軍隊はもつと廣い所にをる必要がある。』と書きました。

病人と怪我人は、厄介だといふので後に殘され、兵士達は分捕品を脊負は

されました。金や銀の皿や、絹や寶石は手押車に積んで運び、他のさま〴〵の分捕品は美しい馬車で運びました。そして、その後には捕虜になつたロシア兵の一列が、重い荷物を負はされ、腰を曲げて從ひました。

かうして行軍がはじまりましたが、兵士達は直ぐに分捕品を道に捨てました。兵士達はたまらない程お腹が減きましたが、食べるものはたゞ馬の肉ばかりでした。一匹の馬が倒れると兵士達は飢えた狼のやうに、死んだ馬に群つて行つて、その肉を我れ勝ちに引き裂いて食べました。兵士達は一きれの馬鈴薯、一掴みの麥を生命がけで奪ひ合ふやうな有樣で、規律が亂れ、上官の命令も行はれませんでした。澤山の兵士は列を勝手に離れて、食物を探がして歩きましたが、食物が見つからない中に、石のごろ〴〵した野原で、飢えて死にました。

それにコサック騎兵が後から追つて來るので、フランス軍はへと〳〵になりながら、前へ〳〵と行軍を續けました。すると、激しい寒さと一しよに、大雪がやつて來ました。雪は忽ち、道も、道路標をも隱くしてしまひます。降る雪で行くては分りません。切るやうな風は骨を刺します。道が分らないので、探し廻つてゐる間に、骨も肉も痺れてしまつて、その儘死んでしまひます。すると直ぐに雪が降り積つて、其死骸を埋めてしまふといふやうな有樣でした。

追つかけて來たロシア兵は、後に殘されて、うろ〳〵してゐるフランス兵を殺しましたが、もう此方には、戰ふ勇氣がありません。それに指が凍つてしまつて、鐵砲を雪の中に取り落した儘、行軍する兵士もありました。併し生き殘つた僅かな者は、なほも屈せず、

『スモレンスク！　スモレンスク！』と叫びながら進みました。スモレンスクは一同の目標でありました。一同は、スモレンスクまで行けば、休むこともできければ、食物にも有りつくことが出來ると思つたのです。

併し、スモレンスクの都に着いて見ますと、そこも矢張りモスコーのやうに火事で灰になつてしまひ、食物も着物も殘つてゐませんでした。こゝで暫時休んで、また退却をはじめ、ボリソフの都の近所のベリシナ河に參りましたが、この河にはへな〳〵した二ッの橋がかゝつてゐました。この河で實に恐ろしいことが起つたのです。

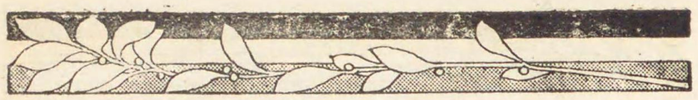
フランス兵がこの河を渡らうとしました時に、ロシア兵に襲はれたのです。周章てふためいたフランス兵は、我れ勝ちに橋を渡らうとしましたが、人間の重さで橋の一ッがどんと落ちました。すると橋の上に居つたフランス兵は皆な、氷のはつた河の中に落ちて死んでしまひました。そこで今度は、狂人のやうになつたフランス兵は、味方を踏み殺しながら今一ッの橋の上に突進しました。するとロシア兵が後から盛んに鐵砲を打ちますので、フランス兵はその彈丸にあたつて、雨のやうに橋の上から落ちました。フランス兵の悲しい叫び聲や、鐵砲の音、ロシア兵の萬歳を叫ぶどら聲が混り合つて、凄じい音が空に響きました。こゝでフランス兵は一萬二千人死にましたが、殘つた兵士は、ヴイルナに向つて苦しい行軍を續けました。

それから十日の後、乞食のやうな服を着けたフランス兵は、跛ひき〳〵這ふやうにしてヴイルナの都に入りました。これより先き、ナポレオンは、『ヴイルナの都から外國人を凡て追ひ出して貰ひたい。我軍隊は今はあまり綺麗でないから。』と手紙を送つたのでありました。併し、軍隊がヴイルナに

入る前にナポレオンは、パリーに騒動が起りさうだとの通知を受けたために、憐れな軍隊を見捨てゝ、自分は毛皮の外套にくるまつて、馬を急がせパリーに向つたのです。

さうしてゐる間に、幽霊の行列のやうなフランス軍は、コザック兵に追はれながら、九月の中頃に、やつとニーメン河を渡つて、コーニスブルグに着き、そこで一安心して休みました。

かうして、ロシア征伐のために出發した六十萬の兵士は、たつた二萬人となつて歸つたのでありました。



九、エルバの皇帝

ロシアへ行つたナポレオン軍は大抵ヨーロッパ各國から集めた兵卒で、その中、僅に六分の一だけがフランス人でした。その中には無事にナポレオンと共に歸つた立派な士官や強い兵卒も澤山ゐました。そこでナポレオンは歸ると直ぐに新兵の募集にとりかゝりましたが、ロシアでは負けてもナポレオンの名聲は、まだ人の心を醉せる力を持つてゐましたから、新しい軍隊が直ぐにでき上りました。がその集つた兵士は大抵二十歳以下の少年でありました。ナポレオンは非常に大急ぎで、熱心に戰爭の用意をしなければなりませんでした。といふのは、弱いスペインが強いフランスに反抗して戰つたのに

勵まされてゐたところへ、ナポレオンがロシアで負けて歸つたのに勇氣を得たプロシヤは、もう一度自由のためにナポレオンと戰爭をしようと決心したからです。

プロシヤでは老人も、青年も男も女も、軍旗の下に集つて參りました。貴婦人は、戰爭の費用にといつて寶石を持つて行きました。ロシア皇帝はプロシヤ老帝に逢ふためチルシットに來ましたが、老帝は、ザーに挨拶した時、眼にほろ〳〵と涙を流してゐました。

『涙をお拭きなさい。その涙は、ナポレオンがあなたに流させる最後の涙でせうから。』とザーが申しました。

この戰爭は六月から十月まで續きましたが、今度は何時ものやうにナポレオンも勝ちつゞけに勝つといふやうには行かず、遂にリープシックスの戰ひで敗北してしまつたのです。

戰爭は、十月の十六日にはじまつたのでしたが、十九日には打ち破ぶられたナポレオンとその軍隊は、幾千の死人と、捕虜と、五六百の大砲と兵糧と彈藥を後に捨てゝエルベ河を渡つて、雪崩のやうに退却したのです。

ナポレオンの負けたのを知つたヨーロッパ各國は、フランスの壓迫から脱して自由を得ようとする運動をはじめました。オランダと獨逸はフランスの三色旗を引き裂き、自分の國の國旗を高く揭げました。獨逸の彼方此方の城砦を守つてゐたフランス兵は、城を開け渡さなければならなくなりました。

十一月十九日にナポレオンがパリーに歸りますと、列國同盟はナポレオンに平和條件を突きつけました。この條件といふのはベルギー、サヴオイ、ニスを殘して、ナポレオンが攻め取つた國を、すつかり元の通りに返せといふ

のでした。併し、ナポレオンはまだほんとに自分が負けたとは思ひませんでしたから、そんな條件には一歩も讓らうとはしませんでした。そこで同盟軍がパリーに向つて進軍してまた戰爭がはじまつたのです。

『我々はフランスと戰ふのではない。たゞナポレオンと戰ふのだ。』

かう同盟軍は叫んで、四方からパリーに攻め寄せたのです。

さて、フランスでは、人民はナポレオンに飽き、戰爭に疲れてゐましたが敵が自分の愛する國に入つて來ましたから、武裝して戰ひの用意をしました。ナポレオンもまた〳〵出陣の準備をしました。

一月二十三日、その日は丁度日曜日でしたが、ナポレオンは臣下をチユレリー宮殿に集め、最後の嚴そかな謁見をしました。ナポレオンは皇后と三つになる皇子を連れて、集つてゐる臣下の前に出ましたが、皇子を兩手で抱きながら、

『諸君、フランスは敵に侵されようとしてゐる。余は自ら軍隊の先頭に立つて戰はう。余は、自身の最も愛する妻と子を諸君の保護に委かす。』といひました。

その後、二日してナポレオンは皇后ルイズに暇を告げて宮殿を出ましたがそれから後、ナポレオンと皇后はもう再び逢ひませんでした。といふのは、その後ナポレオンが負けてパリーに歸つた時には、皇后は勢を失つた皇帝を捨てゝ逃げてしまつたからです。

さて、ナポレオンは幾度となく戰爭をしましたが、今度の戰爭程ナポレオンの軍人として偉さを現はした戰爭はありませんでした。ナポレオンは今までは大てい、自分の軍隊よりも數の少ない、その上訓練の足りない敵に當つ

たのですが、今度は訓練の足りない新兵で、數の多い敵に當つて勝利を得たのです。

併し、遂にはフランス軍は負け戰さとなり、敵は村を取り、町を燒き、フランスの美くしい地方を荒らして、パリーにまで押し寄せて參りました。

かうして、『オルレアンの少女』この方、外敵の叫びを聞かなかつた美しいパリーの周圍は、プロシヤ、ロシア、オーストリア、オランダその他ヨーロッパ各國の軍隊にふみにじられて、血と火の地獄となつたのでした。そしてパリーはたうとう敵の手に占領されてしまひました。

一千八百十四年三月三十一日、ロシア皇帝とプロシヤ王は馬を並べてパリーに入り込みました。怒つて罵る叫び聲と、救主が來たやうに『ロシア皇帝アレキサンダー萬歳！　プロシヤ王萬歳！』と喜び叫ぶ群衆の中を二人の皇帝は進みました。

この時にはもう、ルイズ皇后は皇子を連れて逃げのびてゐました。ナポレオンはシャンパーギュの戰場から軍を返へさうと急ぎましたが、もう戰爭は終つたといふ報知を受けました。

『パリーへ！』とナポレオンは怒鳴りました。

『陛下、もう遲う御座います。パリーは敵のものになりました。』と一人の士官が申しました。

ナポレオンはこの時まで、ヨーロッパの半分を我物とした皇帝でありました。ナポレオンは王の上の王で、王達はナポレオンの考へ一ッで位に上せられたり、位から下げられたりしました。ナポレオンは幾年もかゝつて大帝國を築きあげましたが、それが數ケ月の間に敵の手に取り返へされ、今は自分

の身を置くパリーの都さへ、自分の物でなくなつたのでした。

一千八百十四年四月二日、元老院は遂にナポレオンをフランスの皇帝の位から退けるといふ布告を出しました。

併し、ナポレオンは、自分は何も彼も無くしてしまつたことを信じないで、フォンテンブローで觀兵式を行ひましたが、ナポレオンと共に始終戰場に行つた將軍達は、どこまでもナポレオンのために戰ふといふ熱心を現はして、

『パリーへ！　パリーへ！』

と叫びました。

併し、疲れ切つた士官達は、

『戰爭はもう澤山だ。この上パリーの市街戰は眞平だ。』と申しました。

そこでナポレオンも仕方なく『同盟各國は平和の邪魔者たるナポレオンが

フランス皇帝の位を退き、己をその國民の手に任かすことを望む。』といふ書面に署名してフランス皇帝の位を退きました。

四月の二十日にナポレオンはフォンテンブロー宮殿の庭前で軍隊に別れを告げました。しかし、部下の士官兵卒達はまだナポレオンを愛してゐましたから、別れを惜む涙が、日に燒けた頰に流れて、すゝり泣きの聲さへも聞えました。

『余は諸君を一人一人抱くことができないが、諸君の代表たる大將を抱く。』

ナポレオンはかういつて大將プチーを抱いてキッスをいたしました。それから又、燒くやうな日や、雨の空や、夏の暑さや、冬の雪をくぐりぬけて來たフランスの國旗にキッスをしました。そして用意の馬車に乘り込みました。馬車は直ぐに南方に向つて走り出しました。

併し、ナポレオンはフランス皇帝の位を退きましたが、まだ名前だけは皇帝でありました。それは、イタリーの西にある豆粒位の小さい島の皇帝にされたのでした。

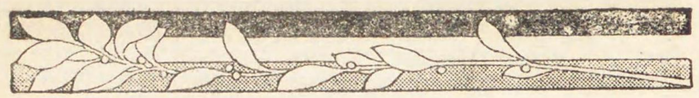
最初、馬車がフランスの國内を通つてゐる間は、行く途々で人民達はナポレオンの馬車に向つて萬歳を稱へましたが、だん〳〵南の方に進むに從つて人民は馬車に向つて大聲で呪詛の聲を浴びせかけました。といふのは南方の百姓は、自分の子供や、兄弟や、親がナポレオンのために戰爭に連れて行かれて、遠い他國で戰死した上に、働き手のない田畑は荒れ果てゝすつかり貧乏になつてしまつたのですから、ナポレオンを非常に憎んでゐたのです。

かういふ風で、ナポレオンは何時人民のために殺されるか知れないので、途中オーストリアの士官に姿を更えて、やつと南方の海岸に逃げ延び、その

海岸からエルバ島に向つて船出をしました。

ナポレオンは途中かうして人民から呪咀を受けましたが、エルバ島の人民からは大變に歡迎されました。このエルバ島で大皇帝ナポレオンはしばらく島を治めてゐました。

大皇帝の領地であるこのエルバ島は廣さ僅かに四十方里位しかありませんでした。併し、ナポレオンはこゝで五六百の軍隊を有し、チユーリレー宮殿でやつてゐたやうに宮殿で尊嚴な儀式を行つてゐました。が、宮殿といつても普通の田舍家よりは少し大きい位でした。



十、セント、ヘレナ

さうしてゐる間に、死刑にされたルイ十六世の兄がフランス王となりましたが、この人は馬鹿ではありませんでしたが、フランスばかりでなくヨーロツパ全國が、麻のやうに亂れてゐるこの際、どうして治めてよいか知らなかつたのです。そこへ獨逸の城砦に捕はれてゐたフランス兵が歸つて來て、自分等が長い間戰爭の苦勞を嘗めたのに、本國へ歸つて見れば、まだ爭ひが止まないで、安心して生活ができないものですから、も一度ナポレオンが現はれて、天下を治めて貰ひたいと願ふやうになりました。

もう十一ケ月もエルバ島で遊び疲れたナポレオンは、この機會を見逃がさ

ず、も一度運試めしをする決心を固めて、ヱルバ島を逃がれ出て、一千八百十五年三月の一日にカンヌの近くに上陸しました。

ところが、グレノーブルまで來ますと、ナポレオンの上陸を防がうとする軍隊に出逢ひました。ナポレオンはヱルバ島から自分の極く僅かな兵隊を率ゐて來てゐたのですが、たつた一人敵の前にとび出して行つて、

『諸君、皇帝を殺したければ殺し給へ、俺は皇帝だ。』といつて、外套を脱いで、後に投げ捨てゝ敵が打つてかゝるのを待つてゐました。併し、敵は打つてかゝらない許りか、『皇帝萬歳！』と叫んで、直ぐにナポレオンに從ひました。

リオンではブルボン家の大將が逃げ出しましたから、ナポレオンは直ぐにリオンの都に入りました。そればかりでなく、もと、ナポレオン方の大將で

「勇者中の勇者」とナポレオンにほめられた男が、『ナポレオンを獣物のやうに鐵籠に入れて生捕つて來る』といつてナポレオンに向つて來ました。しかし、ナポレオンを見ると、直ぐナポレオンに降參しました。かうして大きな灰色の外套を着た小男のナポレオンは行く先き〳〵で澤山の兵士を集めました。ナポレオンに味方した兵士は皆、ブルボン家の白の帽章を引きぬいて、地面に投げつけ足で踏みにじりました。

かうしてナポレオンの三色旗が、また〳〵勢を得て來たので、フランス王ルイは、夜の暗闇にまぎれて、ベルギーに向つてパリーを逃げ出しました。さうしてゐる間に、ナポレオンは三月十九日に、たうとうフォンテンブローに着き、次の日パリーに入りました。

さて、ヨーロッパ各國の代表等がウインナに集つて、亂れてゐるヨーロッ

バをどうして救はうかと評議してゐる時に、ナポレオンはエルバ島を逃がれて、パリーに向つたといふ不意の報知が來たので、吃驚して色を失ひました。もと〳〵ヨーロッパ各國はナポレオンが位を退いてこの方、少しも一致しないで喧嘩ばかりしてゐたのですが、ナポレオンがまた現はれたといふので、今度は喧嘩を止めて一致して、急いで軍隊を集めナポレオンを伐つことになりました。そこで六月にはロシア、プロシヤ、サルヂニヤ、オーストリア、ポーランド、ベルギー、獨逸、英國の諸國から、軍隊がフランス指して集りました。

併し、ナポレオンは外國兵を一足もフランスに入れないつもりで、此方から北の方へと進んで行きました。ナポレオンは何時ものやうに素早く軍隊を進めて大勝利を得、一打ちで同盟軍を打ち破つて、もう一度フランス皇帝の位に即くつもりでした。

かうしてナポレオンの最後の戰爭は、ベルギーで起つたのでした。

敵方は名に負ふウエリントン公が同盟軍を指揮し、殘忍無比のブルーチヤー將軍がプロシヤ軍を率ゐてゐました。

時は六月の十八日、處はウオターローの野に於て、ナポレオンは雲霞の如く攻め寄せた同盟軍と、最後の大戰爭を開きました。

戰爭の始まる前の晩から雨が降つて、風も吹き荒れてゐましたが、次の日の朝になつても雨は止みませんでした。其ためにウオターローの野は沼地のやうにどろ〳〵になつて、戰爭がはじまつたのはやつとその日の晝頃からでした。戰爭は、どんより曇つた暴風の中で一日中續きました。この戰爭は全國民の戰爭といつてもよい位で、ウエリントン公の率ゐる軍隊だけで五ケ國

の言葉が用ひられてゐた位でした。

ウオターローの戰爭の眞最中にプロシヤ軍を率ゐるブルーチャー將軍は、同盟軍に合するため、泥の中を大砲を曳きづり〳〵前進して參りましたが、沼地のやうな道を喘ぎ〳〵よろめきながら進んで來たので、兵士達はすつかり弱つてしまひ、

『これから先きもう進めない！』と叫びましたが、ブルーチャーは聲を張り上げて、

『進め！　我が愛する兵士等。私はウエリントンに約束したのだ。どうか私にその約束を破らせないやうにしてくれ。』と叫びました。

そこでまた兵士は、前へ〳〵と喘ぎながら進みました。併し、行軍は遲れて、やつとその日の午後に戰場に着きました。

さて戰爭は、どちらが勝つか負けるかいよ〳〵決勝點に近づきました。ナポレオンは殘して置いた近衞兵に、進軍の號令をかけました。併し、近衞兵が、英國兵の攻擊に對して、腰を曲げて逃げ出したのを見たナポレオンは死んだ人のやうに靑くなりました。

『何故だ。何故、狼狽へるのだ。』と味方の逃げるのを信じられないやうに怒鳴りました。『もう駄目だ。生命だけでも救へ。』

泡を喰つたフランス兵は、列を亂して逃げ出しましたが、新手のプロシヤ兵は、夜から朝方にかけて、これを追擊して、何の容赦もなくフランス兵を殺しました。

怒りと失望の涙を、その靑い頰に流しながら、ナポレオンはフランスに逃がれて、六月二十日にパリーに着きました。するとその次の朝、ナポレオン

皇帝がたつた一人で逃げて來て、フランスの大軍隊が殘り少なになつたといふ噂が、忽ち四方に擴がりました。

そこで流石のナポレオンも、自分はもう戰爭に負けてしまつたたゞの人間で、パリーの市民には用のない人間となつてしまつたことを知りました。その上自分に從ふ軍人も極く少くなりましたから、再び皇帝の位を捨てることになりました。かうしてナポレオンがエルバ島から歸つて、再びフランス皇帝となり、そして戰爭に負けて位を退くまで、たつた百日間でありました。

ナポレオンは自分の國の人民からフランスの國を去るようにとの命令を受けました。

併し、その時、英國の軍隊が港々に番をしてゐましたから、とても逃げ出すことが出來ませんでした。そこでナポレオンも仕方がありませんから、たうとう英國の軍艦ベルロフォン號の司令官に身を任かし、英國に連れて行かれました。ナポレオンはこの時、英國の皇太子に、

『私は英國の人々の爐傍に坐るために英國に參ります。私は英國の法律の保護の下に私の身をお任かせします。殿下が一番力づよい、一番信實な、そして敵に對し一番慈悲深い方として、私は一身の保護を御願ひします。』

と書いて送りました。

ナポレオンはフランスを去る時、次第に自分の國の影が見えなくなつて行くのを悲しさうに眺めてゐました。ナポレオンはこの時限り、再び自分の本國にその足を入れず、再び太陽にかがやくフランスの海岸を見ることが出來なかつたのです。この時ナポレオンは、まだ四十五歳でした。

ナポレオンが英國に勝つて、それを自分の屬國にしようとしたのは夢であ

つて、今は見すぼらしい落人として、英國に上陸することさへ許されませんでした。ナポレオンはベルロフオン號に閉ぢ込められて自分の運命を待つてゐましたが、その中に英國の政府から一通の手紙がナポレオンの手に屆きました。それには、

『ナポレオンを南太西洋の小島セント・ヘレナに流し、一生そこに閉ぢ込めて置くように。』

と書いてありました。

ヱルバ島は、たとへその領地は小さくとも、ナポレオンはその島を治める皇帝でありました。法律を作ることも出來たし、税金を集めることも出來たし、小さいながら宮殿に住んで軍隊に守られてゐました。併し、ヨーロッパから二千里も遠く、一番近い陸地からも九百里も離れてゐる荒れ寂びたセント・ヘレナでは、ナポレオンは捕はれた囚人でありました。

セント・ヘレナは、周圍がたつた二十一哩しかない小さい島で、遠くから見ると、海の中に出てゐる黑い岩の一塊にしか見えませんでした。つい、こないだまで頭に王の冠を戴いた身が、今は囚人となつて、はてしない海の眞中の小さい島に流されて行くのです。ナポレオンには、セント・ヘレナは、身慄ひする程恐ろしい、嫌な場所でありました。かつては盤の上の將棋のやうに、勝手に王樣の位を置き換え、人からは鬼神のやうに恐れられたナポレオンも、今は、死んでも生きても差支へのない流人となつてしまつたのでした。

セント・ヘレナに着いてからのナポレオンは、書物を讀んだり、文章を書いたり、將棋を差したりして、寂しい悲しい年月を過しました。

セント・ヘレナに來てから五年の後、ナポレオンは病氣になつて床に就きました。もう息を引き取らうとしてゐるナポレオンは人心地を失つて何か口の中でぶつ〳〵囈言を云つてゐましたが、家の外では暴風が吹き荒んで、大浪が岩に碎け、家の周圍の柳の木が根こぎになつて倒れました。けれどもナポレオンは、そんなことは少しも知らないで、ありし昔の夢を見てゐるやうでありました。

『フランス――軍隊――ジョセフイン――』

とさゝやきました。そして、その後は、ぢつと靜かに眠つてゐました。

風が靜まり、五月の黃金色の太陽が今一度穩かな青い海を照して、西の方の海に沈んで行きました。その時、ナポレオンの大きな魂はこの世を去つたのでした。

それから暫時して、ナポレオンの死骸は、最後までセント・ヘレナに從つて來た友達等の手で、ナポレオンが何時もよく坐つた柳の木の下に埋められました。英國兵は棺を運びましたが、棺の上にはマレンゴーの戰爭の時に着けた劍と外套が置かれました。英國兵は敬禮のために一齊射擊をし、ナポレオンの墓の上に軍旗を下ろしました。かうして一同は名もなき墓石の下に偉大な皇帝を埋めて、セント・ヘレナを去りました。

その後十八年たつてから、秋の夜中に、提灯の薄明るい光で、ナポレオンの棺が墓から堀り出されて、フランスに持つて行かれました。これはフランス政府が英國の許しを受けて、ナポレオンの死骸を本國で葬式するためでありました。

パリーでは、王も貴族も集つて、廢兵院の堂でナポレオンの棺を迎へまし

た。――王はナポレオンの敵だつたブルボン王族でありましたが、元の偉大な皇帝ナポレオンを尊敬したのです。

『陛下、皇帝ナポレオンの死骸を御渡しいたします。』とセント・ヘレナからナポレオンの棺を持つて來たジョンビーユの王子がいひますと、

『私はフランスの名によつて、ナポレオン皇帝の死骸を受け取る。』とフランス王が申しました。

かうして無比の大英雄ナポレオンは、かねての望み通り、セーヌ河の畔に身を横へたのでありました。（をはり）

昭和二年五月廿八日印刷
昭和二年六月二日發行

（ナポレオン）　◇定價金九拾錢◇
（送料十錢）

著者　山野虎市
發行者　東京府豊野川町中里一二七番地　齊藤保
印刷者　東京市神田區錦町三丁目二十五番地　安進堂小端安之助

發行所　東京市本郷區動坂町三五九　振替東京五九五九六番　電話小石川五三八七番　金の星社

（版權所有）

世界少年少女偉人傳大系

◇一冊金九十錢◇送料十二錢◇

1 ジヤンヌ・ダルク

オルレアンの乙女ジンヤヌ・ダルクが健氣にも、か弱い身を以つて母國を滅亡から救ふ教訓と興味のある物語です。

2 ローマ英雄 シーザー

世界的英雄ジューリヤス・シーザーの幼年時代からローマ元老院で刺し殺されるまでの大活劇を現した歴史物語です。

3 ネルソン

トラフアルガルの海戰に名譽の死を遂げたネルソンが愛國の赤心と責任を重んずる觀念に實に偉大な教訓を讀者に與へます

4 リンコルン

貧しいリンコルンが如何にして大統領の榮位をかち得たか？最も優れた立志傳としてこの『リンコルン傳』をお勸め致ます

5 太閤秀吉

日本の英雄として世界に誇り得る太閤秀吉が大英雄となる迄に如何に苦勞したかを史實によつて興味深く紹介したものです

世界少年少女偉人傳大系

◇一冊金九十錢◇送料十二錢◇

6 ナイチンゲール

ナイチンゲールの少女時代から赤十字の仕事を始めたまでの傳記です。本書により尊ぶべき彼女の一生を知られよ。

7 ワシントン

アメリカ獨立の大恩人ワシントンの少年時代から一生を通じて正直と勤勉と勇氣を以て大事業を完成した偉人の傳記です

8 大楠公

誠忠無二の忠臣楠正成の一生を著者獨得の研究的見方で書いた物で、これ程正成の面目を現はした本はありません。

9 ピーター大帝

少年時代から死に至るまで續けロシアをして世界の強國たらしめた一代の英傑ピーター大帝の一生を知られよ。

10 コロンブス

コロンブスが幾多の困難と戰ひ遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命を書いた血と涙の物語です。

日本歷史實傳物語叢書

▽定價金壹圓
▽送料十二錢

(1) **源義經**

義經ほど皆さんから好かれてゐる武將はありますまい。この本は、義經の生ひ立ちからはじまつて、例の有名な壇の浦で義經がはなばなしい合戰をするあたりまでを、本當の史實をしらべて書いたものですから、實に面白い本です。

(2) **曾我兄弟**

親の仇を討つた曾我兄弟のお話です。五郎十郎の悲しい少年時代から艱難辛苦して遂に親の仇を討つまでの涙のこぼれるやうなお話です。ありふれた講談本と違ひ、三島先生が史實を研究の結果、出來上つた苦心の名著です。

(3) **赤穗四十七士**

赤穗四十七士のお話は誰でも知つてゐるでせうが、この本を讀んだ人でなければ四十七士のことを本當に知つてゐるとはいへますまい。誰にもおすゝめしたいと思ふほど面白く、良い本です。幾度か繰返し讀まずにはゐられぬでせう。

(4) **小楠公**

楠正行のお話は、有名であつても本になつてゐるのは割合に少いのです。正成の死後、南朝のために正行が忠義をつくし、はなばなしい最期を遂げるまでの繪卷物のやうな美しい物語です同じ著者の『大楠公』と共に御一讀下さい。

金の星社編

世界少年少女名著大系

目錄

金の星社の『世界少年少女名著大系』は、少年少女の爲めに書かれた世界的名著を、最もわかりやすく紹介したもので、しかも、有名なる畫家の裝幀になり、クロース製本、箱入の立派な本であります。ありふれたる名著の紹介とは異り、金の星社が全力をそゝいで完成しつゝある一大叢書でありますから、今や熱烈なる歡迎を受け、各圖書館は勿論のこと、少年少女のある家庭には是非なくてはならぬ備品とされてをります。是非御一讀下さい。

(定價各冊金九十錢・送料拾貳錢)

第一編　ロビンソン漂流記

船乘りになつて、遠い國々へ行きたいとあこがれてゐたロビンソンが、途中難船に出遇ひ、無人島へ流されて、艱難辛苦して再び本國へ歸つて來るまでの長い物語りです。世界の少年少女に、これ程澤山讀まれた本はないといはれてゐる位有名なお話です。ですから、この本を讀まない者は一生の不幸だとさへいはれてゐます。

第二編　ナポレオン物語

『ナポレオン物語』は卽ちナポレオンの一代記です。地中海の小島コルシカに生れた一少年ボナパルトが、ナポレオン大帝と稱せられて歐洲を征服する榮華の時代から、遂に南大西洋の一孤島セントヘレナで淋しい死を遂げるまでの變化極りない物語をわかり易く面白く書いたものです。一代の英雄ナポレオンの面影は、必ずや讀者に大きな印象を與へるでせう。

第三編　ドン・キホーテ

イスパニヤのある村にクイザノといふ男がありましたが、毎日騎士の物語りを讀んでゐる內に、氣が少し變になつて、自分が騎士になつたやうに思ひ込んでしまひ、痩馬に乘つて本當に武者修業の旅に出かけ、到るところで大失敗をして、遂にあはれな死をとげるといふ痛快な物語です。

第四編　コロンブス物語

アメリカ大陸を發見したコロンブスの物語りです。コロンブスが苦心慘憺して遂にアメリカ大陸を發見するまでの變化極りない運命と、大きな努力には、感嘆せずにはゐられません。その面白い物語りです。偉人の傳記として、實に興味深い物語りです。

第五編　ガリバー旅行記

ガリバーが、難船して小人島に漂着し、それより大人國を巡ぐる、滑稽と奇拔な面白い物語りで、そこに人生の諷刺や、大なる敎訓が含まれてゐます。世の少年少女諸君に、興味と有益なる讀物として此の本をおすゝめいたします。

第六編　ロビン・フッド物語

『ロビン・フッド』は英國に昔から傳へられてゐる面白い物語りです。シャーウッドの森に住んで正義のために戰つたロビン・フッドの一生は、始めから終りまで胸ををどらせます。惡い知事や僧正や、王をやつゝけて、最後に尼のために毒殺されるあたり、涙なしには讀めません。

第七編　アラビヤン・ナイト

アラビヤに千年餘も傳へられ、世界の珍寶として尊れてゐる物語りです。昔アラビヤに惡い王があつて、毎日一人づゝお妃を迎へては翌日は殺して了ふのを、或日勇敢な婦人が現れて、自ら進んで王の妃となり、その夜から千一夜の間物語つたのが、この『アラビヤン・ナイト』だといはれてゐます。

第八編　ギリシヤ神話　オデッセイ物語

ギリシヤ詩聖ホーマーの作であつて、世界中で一番古い、そして一番面白い物語りとして『イリヤード物語』と共に有名な物語りです。トロイの戰爭に遙々海を越えて出征したオデッセーも、神の怒にふれて、途中ありとあらゆる困難に出遭ひ、遂に乞食になつて本國に歸へる迄の物語。

第九編　シエークスピヤ物語

有名なシエークスピヤの芝居の中で、童話として面白いものばかりを特に選んで物語として書いたものです。『あらし物語』『御意のまゝ』『ベニスの商人』『かみ〳〵女馴し』『眞夏の夜の夢』『冬物語』等、是非一度は讀んで置くべき物語りです。

第十編　グリム童話

童話の開祖グリムの童話の中で、有名な面白いものばかりを集めて一册にしたものです。世界各國の少年少女に幾度讀まれても喜ばれるのは、このグリム童話です。

第十一編　繪入イソップ物語

イソップ物語は古くから知られてゐる話だけに、これまで隨分澤山の本が出てゐる。しかし本書の如く一つのお話に一枚づゝの立派な畫を入れて、お話と畫と兩方で面白く讀ませる本は他にはありません。金の星社が最も自慢の本の一つとして、是非皆さんに見ていたゞきたい。

第十二編　日本神話　古事記物語

『古事記物語』ほど立派な神話は、恐らく世界の何れの國にもありますまい。實際驚く程立派な面白い物語りです。日本の國がはじめて出來た話から始まつて、神々の誕生や、天照大神や、大國主の命の話や、それからずつと末になつて、雄略天皇の御代までの神話です。

第十三編　こども　キリスト傳　新約物語

二千年後の今日まで、世界の救世主としてあがめられてゐるイエス・キリストの一生を聖書に從つて最も正確に書いた本です。この尊い人の一生を子供のために書いたものは外にありません。本書は、わが國にあらはれた最初の子供キリスト傳として廣く世に紹介したいと思ひます。

第十四編　西遊記

支那から印度へ、はる〳〵お經を取りに行つた玄莊三藏の旅を書いたもので、お供には悟空、八戒、沙悟淨の三人の怪物がついて行き、途中で樣々の魔物に出遇ふ物語です。一度讀み出したら本を置けない世界的の名作です。この本を讀まない者は不幸です。

第十五編　ローマ英雄物語

ローマの英雄を中心にして、ローマの歷史を面白く書いたものであります。はじめローマの國を開いたロミユラスとレマスの不思議な生立ち物語りからはじまつて、ハンニバルやシーザーなどの大英雄の物語などが順々に現はれて來て、息もつけぬ程面白い物語です。

第十六編　聖書物語

舊約聖書は世界の最も古い文學として、これ程立派なものは無いと云はれてゐます。宗教の物語りとしても、又一つの物語りとしても、こんなに面白いものはありません。信仰深いアブラハムの。イサクの嫁えらび。鹽の柱になつたロトの妻。鹿の肉の好きなイサク。ヨセフの夢判斷。實に面白い物語です。

第十七編　奴隷トム物語

『奴隷トム物語』を讀んで泣かぬ人は魂のない人です。此の物語は米國で盛んに使はれてゐた哀れな奴隷達の生活を書いたものです。深く神を信じ、如何なる苦しい生活にも、よく堪え忍んで行つた主人公トムの一生をお讀み下さい。世界まれに見る偉大な傑作です。

第十八編　ギリシヤ英雄物語

ギリシヤ英雄の傳記は、少年少女の讀み物として一度讀み出したら止められない程に興味のある物語です。本篇はこれまで、世間に出てゐるものと違つて、有名な世界的文豪キングスレーが、自分の愛兒のために特に著した名著を、土臺にして書いたものだけに、最も理想的なものとして誇ることの出來るものです。

第十九編　アンデルセン童話

世界第一の童話作家アンデルセンの童話は何人も讀んで置かなければならないほど尊い世界の寶です。本書に收めた作は、アンデルセンの作の中でも最も代表的なものになつてゐる立派な作ばかりですから、本書一冊を讀めばアンデルセンの作が全部わかるわけです。立派な傑作集です。

第二十編　小公子

『小公子』の名は古くから知られてゐます。はかない運命に生れた小公子の物語りは、少年少女の必讀書として世界各國に推賞されてゐるものです。早く父の死に出遇ひ、神の如く清き母の手に育てられながら、頑迷なる祖父の家に引取られ、絶えず悲劇の主人公として活躍する小公子の運命の物語りを御一讀下さい。

第二十一編　母を尋ねて三千里

海山三千里、遙々と母を尋ねて行くあはれにも、けなげな少年の物語『母を尋ねて三千里』をはじめ、世界的名作『クオレ』の中の物語を集めた大名著です。

第二十二編　不思議國めぐり

英國の少年少女が聖書の次に多く讀むといふ程有名な作です。アリスといふ少女の夢物語ですから、奇想天外奇々怪々、とてつもない面白い〳〵お話です。

第二十三編　青い鳥

メーテルリンクの世界的兒童劇『青い鳥』を物語として紹介したものですから讀んで一層の興味があります。青い鳥を探しに行く兄妹の不思議な物語です。

第二十四編　爲朝一代記

鎭西の八郎爲朝が琉球へ島流しにされてからの物語です。そして遂に爲朝が琉球王になるまでの變化極りない雄大な物語です。これ程面白い話は少いでせう。

第二十五編　ハムレット

有名な芝居の作者シエークスピヤの作で、デンマークの王子ハムレットのあはれな物語です。お話の中にはオフエリヤ姫のやうなやさしい人も出て來て、一層のあはれを感じさせます。

第二十六編　新ロビンソン漂流記

スキスを船出した汽船が途中で難船して一家族六人無人島に上陸します。そしてその島で救ひの船の來る迄の二年間、猛獸と戰つたり、猿や駝鳥を友達にしたりして暮す痛快なお話。

第二十七編　ポムペイ最後の日

伊太利の火山が爆發して地下に埋つてしまつたポムペイの町は千七百年もたつた此の頃になつて掘出されました。其ポムペイの町が丁度埋まらうとした時の事を書いたのが此の物語です。

第二十八編　少年鼓手

ナポレオンが伊太利征服のために雪のアルプスを越えて雪なだれに出遇つた時、勇敢な働きをした少年鼓手をはじめ、勇壯な少年と少女のお話十種を集めた面白い〳〵本です。

第二十九編　ロミオとジユリエット

原作は世界の文豪沙翁の作で、最初から終りまで泣かずには讀めない哀れな物語です。最後は二人の死によつて終る悲劇中の悲劇ですから、悲しい話の好きな方は是非お讀み下さい。

第三十編　ジヤンバルヂヤン（あゝ無情）

『あゝ無情』といふ題で皆さんの御承知のジヤンバルヂヤンの物語です。泥棒をしたジヤンバルヂヤンが立派な人間となつて世の中の爲に働いて、哀れな人達を救ふ實に立派な物語です。

第三十一編　竹取物語

『竹取物語』は日本の兒童文學としてこれ以上のものは無いといはれてゐるものです。竹の中から生れたかぐや姫を中心にして、大勢の皇子達の物語は實に面白く、日本文學の大傑作です。

第三十二編　みなし兒

英國の文豪ヂツケンスの傑作で、みなし兒デビツド少年の生ひ立ちを書いたものです。繼父のために家を追はれ、流れ流れて乞食になり最後に伯母の暖い手で救はれる涙と愛の物語です。

第三十三編　平家物語

日本にある昔の物語の中で、之ほど名高いものはありません。平家の盛りを極めた時から、滅亡に至るまで美しい文章で書かれてあります。それをわかり易く書いたのはこの本です。

第三十四編　フランダースの少年

英國の女流作家ウイダの作で、日本にも古くから紹介されてゐる世界的名作です。犬と少年を主人公とした哀れな話で、人間と獸との美しい情愛には、讀者に深い感動を與へます。

第三十五編　ジーグフリード王子物語

この物語は獨逸に昔からある英雄傳説です。困難に遇つても挫けず、あくまで進んで、その困難を征伏しやうと云ふ勇壯な精神の中に、優しい心をもつたジーグフリード王子の物語です。

第三十六編　トルストイ童話集

世界に有名なロシヤのトルストイの作の中から、面白くそして教訓になる話を選んだものです。この本には、作者獨得の藝術味のあるお話ばかりで少年少女に深い感動を與へます。

児乙部27-Y-3
1200600483633